
君を想う夜

水原 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を想う夜

【Nコード】

N4558R

【作者名】

水原 凜

【あらすじ】

ずっと付き合っていた高志に裏切られた穂乃香。その現場に居合わせたのは、穂乃香が胡散臭いと常日頃思っている越野課長だった。

（サイトにて完結済みです。）

こんな人が出てます

橘 穂乃香

22歳。OL。本編主人公。高校時代から好きだった大野高志から高校3年生の夏に告白されて、4年間付き合っていたが、二股をかけられていること知り、課長の越野に半ば助けられる形で別れる。因みに越野のことはずっと前から「胡散臭い」と思っている。

性格は、天然で、ぼくっとしているが、越野の本性を感じ取るなど観察眼には優れている（が、二股をかけられているのに気づかないあたりはやはりぼくっとしてるからか？）

越野 暁

29歳。穂乃香の勤める会社の上司で、同課の課長をしている。

穂乃香の彼が二股をしていると穂乃香が知ったときに同席していた。以前から穂乃香を気に入っていたため、彼女を酔いつぶして半ば強引に自分のものにする強かさあり。

性格は、会社では温厚だがその実強かで俺様なところ多々あり。

小山 真紀

22歳。穂乃香の高校時代からの親友で、彼女の彼氏清水亮との出会いは高志と親友だったからだ。その為、清水とのことで何かあれば穂乃香に相談したり、反対に高志との事を穂乃香から相談を受けたりする間柄。

性格は、しっかりもので友情がなによりも大切にされていて、そのことでしばしば清水と口論になることもある。

大野 高志

22歳。穂乃香の元カレ。二股男。女にだらしく何でも適当に言いつくろって生きてきた。先輩の清水とは大学生になってからの

知り合いで、穂乃香と別れたことで絶縁されるが、そんなことも気にせず自由気ままな性格。因みに自分のことは「カッコいい」と思っている勘違い男でもある。

清水 亮

23歳。会社員。真紀の彼氏で真紀と穂乃香の友情にしばしばデパートを邪魔をされて口げんかになることが多い。以前から高志の二股には気づいていて、穂乃香のことを不憫に思っている。そんな中、二人が別れたと聞き、激怒。絶縁する。

性格は大人で芯のしっかりしたタイプで曲がったことが大嫌い。

ずっと、橘のこと見てたんだ。俺と付き合ってくれないか？」

そう告白されたのは4年前の高校3年生の夏だった。

大好きだった高校の同級生、高志からの告白にちよつと戸惑った穂乃香だったけど、思い切つて頷いたのはそれから一ヵ月後。

お互い受験前の大事な時期。

二人は夏期講習の合間を見て、花火にも行つた。

——穂乃香のファーストキスも、この時の大切な思い出だった。

そんな幸せな時間がずっと続くと、そう思っていた。

「ねえ、穂乃香。今夜飲みに行かない？」

親友の小山真紀にそう誘われたのは、穏やかな昼休みが終わる少し前だった。真紀とは高校時代からの付き合いで、たまたま同じ会社の同じ課に配属されたのだ。

こんな偶然があるんだねと、二人で笑い飛ばしたものだ。

「え？今日？」

真紀がこんなに突然に誘うことなど滅多になく、（しかも今日は金曜日だ）穂乃香は思わず聞き返してしまう。

「——う、うん……。」

穂乃香の問いかけに、真紀は歯切れの悪い返事をする。真紀とはかれこれ7年ほど付き合っているが、こんな風に返事することなど一度もなかった。

「どうしたのよ、真紀？——何か心配事でもあるの？」

「ううん。そうじゃないけど、さ。」

「またしても真紀らしくない返事が返ってくる。」

「何よ、どうしたの？まさかまた清水君と喧嘩したとか？」

「違うわよ！！それにまたって何よ！！亮と喧嘩したって穂乃香に泣きついたのは1回だけじゃない！！」

「やっと真紀らしくなったじゃん？」

そう言ってからからと笑う穂乃香に真紀も苦笑を返す。もう社会人になってるというのに、高校時代から変わらない自分たちのやり取りに苦笑を返すしかない、というところだろうか……。

真紀はふうと大きなため息を吐くと、今度は話題を変えるために社員食堂の中を見渡した。穂乃香のほうも真紀と同じように社員食堂の中央の方に視線を向ける。

「——ねえ、前から思ってたんだけど、越野課長ってカッコいいよね？」

「へ？か、課長？」

突然の真紀の言葉に、穂乃香はびっくりしたように聞き返した。

「そ、越野課長。——いい男と思わない？世間一般的に。」

穂乃香は見渡していた焦点を、部下たちと楽しそうに話している越野に合わせた。

（たしかに、顔は整っていると思うけど……。）

「モチロン、好き嫌いは別にしてよ？」

真剣に考えている穂乃香に真紀はくすつと笑う。

「仕事も出来て、人柄もいい。その上容姿まで整っていて、彼が声を荒らげるところを未だかつて見たことがない。これをいい男って呼ばなきゃ、誰を呼ぶの？」

「って感じじゃない？」

——いつもそうだ

真紀は何かと言うと、課長の越野を褒めている。

「ねえ、それって、清水君より課長の方がいいって言ってるみた

いに聞こえるよ?」

越野のことをあんまり快く思っていない穂乃香はため息と共にそう問い返した。

(——どう見たって胡散臭いじゃん。)

それが穂乃香の越野に対する感想だ。

因みに親友の真紀にさえ言っていないが、

(——だって、ね。誰にでも優しいとか、声を荒らげているところを見たことがないって、普通じゃなくない?)
とさえ思っていたりする。

「あくまで、『世間一般的に』よ。私の亮は、越野課長みたいにいい男じゃないけど、私にとっては一番なの!!」

そう力説する真紀に、穂乃香は笑いを返す。

「はいはい。知ってますよ〜だ。」

からかわれたただだと分かった真紀は、今度は顔を真っ赤にして俯いた。二人は付き合い初めて2年だが、まだまだ初々しい反応を返す真紀に穂乃香はうれしく思う。もともと亮は穂乃香の彼である高志の紹介で知り合ったのだ。

二人の縁結びをした穂乃香としてもうれしい限りだ。

「で?」

「で?って?」

「真紀がこんなにいきなり飲みに行こうって言った理由よ。——
—今までそんなこと一回もなかったでしょ?」

「……うん。」

「何よ、言いにくいこと?」

「——そういう訳じゃないけど……。」

そう言いつつも、言いにくそうな真紀に穂乃香は怪訝そうな表情を返す。

「……会社じゃ言いづらいこと?」

真紀は否定も肯定もしない。だが長年付き合い合ってきた穂乃香には分かる。真紀が否定をしない＝肯定であることを……。

「分かったわ。じゃあ、今日の夕方にちゃんと教えてね。」

そう話す穂乃香の視線の先に、食器を片付け、食堂を跡にしようとする人々の姿が映った。

昼休みの終了だ。

穂乃香も真紀も他の人に倣って食堂を後にした。

「橘さん。悪いけど今日、少し残業してくれるかい？僕の仕事を手伝ってもらえると嬉しいんだけど」

その日の午後四時。

これから飲みに行くのでどうやって仕事を定時に終わらせようかと思っていた穂乃香に課長の越野が声をかけた。

「え？今日ですか？」

「ああ。もし予定がなかったらでいいんだけど・・・。」

本当にすまなそうに問いかける課長の言葉に、穂乃香は慌てて周りを見渡した。だが、誰もが気まずそうに穂乃香の視線を避けるように俯く。

当然だろう。週末前の金曜日。穂乃香に変わって残業を引き受けてくれるような人などいるはずもない。穂乃香はそつとため息をついた。

せつかくの金曜日だ。しかも今日は真紀と約束をしているのだ。

『予定がある』と告げようとした穂乃香を真紀が隣の席からつづいた。

「今度でも、いいよ。」

そう小声で告げる。

（まあ、しょうがないか。仕事だしね。真紀もいって言うてるし。。。）

そう結論付けると、了承する旨を越野に伝え、早々にパソコンに向かって仕事をする事とする。

金曜日に夜の遅くまで残業って事だけは御免こうむりたい。

——越野課長ってカッコいいよね。

先ほどの昼休みに穂乃香の親友、真紀がぼつりともらした言葉が穂乃香の脳裏にふとよみがえる。その本人である真紀は残業を命じられた穂乃香を見捨ててさっさと定時帰宅していた。

（——まあ、確かにね…。）

穂乃香は自分の机に向かって眉間に皺をよせ、やや難しい顔でパソコンを操っている越野の顔を盗み見しつつ心の中でそつと呟いた。穂乃香自身は越野がやや苦手ではあるが、客観的に見てみると真紀の言う、『カッコいい』という言葉に頷ける。

越野はまだ20代後半ではあったが、彼よりも年配の人を押しつけこの4月から課長と言う大任を任されている。しかも、その容姿は『どのモデルですか?』と問いかけてしまいたくなるくらいには整っているのだ。それはもう、嫌味なくらいに…。

上司には信頼され、部下からも慕われている彼は、文句なくカッコいい部類には入るだろう。

「彼が声を荒らげるところを未だかつて見たことがない。」

そう証言する人もいる。彼は誰にでも好かれ、そして誰にでも優しい。そんな人物だ。

『仕事も出来て、人柄もいい。その上容姿まで整っていて、彼を嫌う人間などいないだろう。』

それが彼越野暁に対する周りの評価だった。

（そんな課長を胡散臭く見てるのって、私くらいだろうな・・・）
そう苦笑をもらしてまう。

（——だって、ね。誰にでも優しいとか、声を荒らげているところを見たことがないって、普通じゃなくない?）

そもそも、穂乃香は彼を初めて会ったときから苦手だったりする。

モチロン、特に何かあったわけではない。

どちらかと言うと、越野にはお世話になってる一人だったりする。

だが、そんな彼にネツをあげている同僚を横目で見る度、そう意地悪く思ってしまうのだ。

「思わず、欠陥人間じゃない？ って言いたいくらいよ！！」

穂乃香は知らず知らずのうちに、声に出してしまっていた。

「欠陥人間って？」

そう自然に問いかける男性の声に、穂乃香は気にも留めずに返事を返す。

「だって、誰にでも優しいってところからしておかしいじゃない。それって、皆同じで特別な人がいないってことでしょ？ そんな人間として、どうかと思うわけよ。」

「そうかな？」

「そうよ。それに『彼が声を荒らげるところを未だかつて見たことがない。』ってのもどうよ？ って思わない？ 感情が欠落しているとは思えないもの。」

「——因みにそれって、誰のこと？」

その男性は半ばおかしそうに問いかけた。

「モチロン、課長のことに決まってるじゃない。」

そう断言する穂乃香の言葉に、苦笑が帰ってきた。

「へえ？ 橘は俺のことそんな風に思ってた見ていたんだ？」

半ば面白そうに問いかける男性の声に、うん、と頷きかけた穂乃香の動作がピタツととまる。

（え？）

——俺のこと？

「中々興味深い見解だね。」

ゆつくりと動かしした穂乃香の視線の先にはいたのは、ニコニコと笑っている越野暁、その人だった。

「——げ、か、課長っ」

椅子に座ったまま、半歩退いた穂乃香にお疲れ様と入れたてのコーヒーが手渡された。

「で？」

「『で？』って……。」

その意味するところは分かってはいるのだが、暗にそれを明確にすることを避けたい穂乃香は、そう問い返した。

「橘が俺のことをどう見ているかって事。分かっているはずだよね？」

仕事モードの時の越野は、物腰が柔らかかで、自分の事を常に『僕』と言っていた。

「——か、課長。口調が……。」

いつもと違うのではと言いたい穂乃香だが、そんな言葉も発せないほど、威圧的な雰囲気をもし出している。いつもの『誰にでも優しい越野』とは明らかに違うようだ。

「あ、これ？いつもものは対外的なしゃべり方だからね。因みに本当の俺はコレだから。」

不敵に笑う越野に対し、穂乃香はもう半歩退いた。

「で？橘は俺のことを他にどう見てるのかな？」

じりじりとにじり寄ってくる越野に対し、穂乃香はどんどんと壁に追い詰められていく。

「——か、課長？」

「橘とは一度じっくりと話を聞きたいと思っていたんだ。これから食事に行つてゆっくり話を聞こうか？」

「——し、仕事があるじゃないですか！！」

「この仕事は今日が期限つてわけじゃないからな。」

「じゃ、じゃあ、私が手伝うことなんか……。」

「無論だ。ちょっと橘と話がしたくてな。」

「——話って？」

「勿論。君が俺をどう思っているのか、だ。いつも俺を睨みつけているだろ？」

「——睨みつけてなんて……。」

ちよつと困惑的に眉をひそめる。何かにつけ、穂乃香が越野を見ていたのは本当だからだ。だがそれはさりげなくであつて、よもや気づかれていたなんて思っていないかつたのだ。

「まあ、誰も気づいてはいないみたいだけどね。」

困惑する穂乃香の様子を面白がつているように微笑を浮かべる。

「……………」

「つてことで、今から行こうか？」

「い、行かつてまだ行つてないですけど……。」

「知ってるよ。だが、よもや刃向かう気じゃ、ないよな？」

不敵に笑う越野に、穂乃香はそれ以上何も言えなかつた。

「——だから、そういうつもりじゃないんですつてば。」
ほろ酔い気分の穂乃香は、今日何度目かのセリフを越野に言い募る。

「じゃあ、いつも俺を睨み付けていたのは？」

「睨み付けてなんてないですっ……！」

「じゃあ、何なんだ？！」

面白そうに喉の奥で笑う越野に、穂乃香はひたつと睨み付ける。

「ただ、みんなが課長をカッコいいって言うから……。」

「へえ？じゃ、橘も俺のことをカッコいいって思っているんだ？」

「そ、そんなこと一言も言つてないですっつ。」

「——そうか？」

「そうです……！べ、別に課長のことなんて……。」

「俺のことなんて、何？」

半ば笑いを堪えるように、穂乃香をからかっている様に問う越野に、穂乃香が答えようと口を開けた、その時。

同じ居酒屋の2つ隣の席で仲睦まじげに話している男女の声が聞こえてきた。

「——ねえ、たかし。今日家に泊まっていけない？親が今夜から旅行でいないのよ。」

甘ったるい、男に媚を売るような女性の声が小声ながら聞こえてくる。

二人の席からは、男性の顔は見えない。ただ、その服装から大学生だと窺い知れる。

（———そういえば、最近。高志君の家に行っていないなあ。）

自分の真正面にいる越野をよそに、穂乃香はそんなことを漠然と考えていた。多分、彼女の言った名前がたまたま高志と同じだったからだろう。

何気に振り向いた視線を先には、頷くかどうか迷っている男の背中が見える。

「何？駄目なの？？」

「嫌…。実はさ、明日ちょっと用があつてさ…。」

そう応える男性の声に、穂乃香の肩がぴくんと揺れる。

「何よぉ。また彼女の方を取っちゃうんだ？」

「だって仕方ないだろ？」

「そりゃ、分かつてるわよ。初めは彼女がいてもいいからって私から言つたんだもん。でも、もう彼女と別れるって言うてくれたじゃない。」

「まだ、話してないんだよ、あいつには。———それに今まで付き合つてきたから『情』つてもものも少しあつてさ…。」

その声に、穂乃香は目の前に越野がいることもすっかり忘れ、食い入るようにその大学生の背中を見続けた。

（——あのＴシャツ、見たことがある……。わたしが２年前の高志君の誕生日にあげたやつとそっくりだ……。）

そんなことをぼんやりと考えていた。

その様子を怪訝そうに見つめる越野にはまったく気づかない。

「何よ、たかしってば、口を開くと彼女の話ばかりじゃん。その穂乃香さんって人が社会人になってから、話が合わないって言うてくるせにそんなにその彼女の方が私よりも大切なんだ？」

「そうじゃねって、何回も言ってるだろ。穂乃香よりも葉月の方が好きなんだよ、俺は！！」

そう言い切る大学生が、一緒にいる彼女の方に手を伸ばした左手の薬指には、穂乃香と同じデザインのペアリングが光っている。

（アレは……。）

短大の卒業の記念に二人で買ったペアリングだった。

「——た、高志君……？」

そう呟く穂乃香の声が聞こえてきたのか、先ほどまで深刻そうに話をしていた大学生が慌てたように穂乃香のほうを振り向いた。

——それはまぐれもなく、穂乃香と付き合っているはずの高志だった。

「——ほ、穂乃香？！」

慌てた様子の高志は急いで今まで握っていた彼女の手を振り払った。

「ち、違うんだっ、穂乃香……。コレは……。」

「あ、ちようどよかった。あなたが穂乃香さんなんだ？」

言い訳をしようとする高志の声に重なるように、葉月が妖艶に微笑んだ。

「ちようどよかったじゃない？高志。彼女にちゃんと説明してよね。私たち、もう付き合い始めて半年になるんだってね。」

「は、半年？」

「そ。穂乃香さんは忙しくてあんまり逢えないんでしょう？だから高志はあなたを見限って私と付き合ってるってわけ。」

得意そうに言い放つ葉月に対し、穂乃香のほうは呆然としたまま、黙って聞いているだけだった。

「穂乃香っ、違うんだ。」

そう言う高志の声も穂乃香の耳には届いてこない。

「へえ？ そうなのかい？ じゃあ、丁度よかったよ。」

静かな沈黙を破るように響いたのは飄々とした、越野の声だった。越野は呆然としている穂乃香の腰に手を回し、素早く自分の方に引き寄せた。

「俺たちも、付き合ってるんだ。穂乃香が今付き合ってる彼氏との事で悩んでたんだ。なんて説明すればいいのかってね。」

自信満々に言い放つ越野はそのまま自分の腕の中にいる穂乃香の顎をそっと持ち上げると。

——そして、啄ばむような優しいキスをした。

——俺たちも、付き合ってるんだ。穂乃香が今付き合ってる彼氏との事で悩んでたんだ。なんて説明すればいいのかってね。

先ほどの越野の声が何度も何度も意味も理解できないまま、穂乃香の耳にこだまする。

今、穂乃香に理解できるのは、越野にキスをされたことと、それを高志に見られたこと。そして何よりもその越野の行為を抵抗もせず容認している自分がいることだけだった。

(……頭が痛い……)

短大時代以来、真紀と呑んでなった以来の二日酔いだ。せつかくの睡眠も痛む頭痛で眼が覚めた。

「……ココ、ドコ？」

眼を開けると見慣れない天井が眼に入る。いつも寝る自分の部屋じゃない。かといってどこかのホテルって訳でもないようだ。

(——と、とりあえず、路上じゃないことは確かなんだけど……)

路上どころか、ふかふかのベッドの上にいることだけは間違いない。

(???)

ベッドの中から注意深く周りを見渡した。とりあえず認識できたのは、この部屋が8畳くらいの大きさで、このダブルベッド以外は

最低限と思われる家具しか置いていないこと。この部屋には自分ひとりしかないこと。そして何よりも、ベッドの脇に脱ぎ散らかした自分の衣服。——そして、下着。

（え……。嘘?!）

その時初めて自分が何もつけていないことに気がついた。

（な、何?!どうなってるの!!）

穂乃香は痛む頭を抱えつつ、昨日のことを思い出していた。

（——昨日は課長と居酒屋に行つて、…そっか、高志くんに会つたんだ。）

昨日、高志と別れた後のことはほとんど覚えていない。

（…課長が慰めてくれてたんだっけ。）

つい昨日までは胡散臭いと思つていた課長に慰められた事に、少々落ち込みを感じる。

（——つて、そんな場合じゃないわっ）

ベッドに潜り込みかけた穂乃香はがばつとタオルケットを剥ぎ取つた。

（何をやってるの、私は?!）

ゆっくりこんなことをしている場合じゃない。

昨日何があつたにせよ、取り合えず…。

「取り合えず逃げるべきよね?!」

何がなんだかよく分からない状態で、これは正しい判断だと思つた穂乃香は、ベッドから完全に出て脱ぎ散らかされた服を身に着けるべく下着に手を伸ばした、その時——。

「あ、起きたのか?」

寢室の出入り口として存在している唯一のドアが開き、その声をかけて来たのは越野暁だった。

しかも、バスローブにバスタオルで頭を拭くというおまけつきで…。

「かつ、課長っ!!どうしてここに?!しかもそんな格好で!

！

そう意気込んで聞き返す穂乃香に、越野は可笑しそうに笑って見せた。

「そんな格好って、お前の方がすごい格好だけど？——まあ、眼の保養になるから俺としてはかまわないんだけどね？」

越野の言葉に穂乃香は今、下着すらつけていない格好で裸体を越野に見せ付けていることを知り、急いでまたベットに逆戻りとなる。

「——か、課長？昨日私、何か課長にしました？」

タオルケットを頭までひつかぶってからちよこつと頭を出し、穂乃香は小声でそう尋ねた。

「憶えてないんだ？」

嬉しそうに問いかける越野に穂乃香は小さく頷いた。

（ど、どうしよう。全く憶えてないよあつ。）

「課長に慰められたまでは憶えてるんだけど……。よ、よもや私、課長と寝てないです、よね？」

考えている言葉が途中から不意に口に出てくるのは、穂乃香にとってはいつものこと。そして、本人はまったく気がついていないのだ。

そんな穂乃香に越野が意地悪く笑いつつ、穂乃香が隠れているベツトにそつと腰を下ろした。

「へえ？まさか昨日の事、覚えてないとか言うんだ、穂乃香は？」

その言葉に、ギギギと音が鳴るのではないかと思われるほどぎこちなく、穂乃香は越野の方を振り返った。

（し、しかも、穂乃香ってなに？昨日まではちゃんと『橘』

って呼んでたよね？）

とは思っただが、そんなこと、恐ろしくて聞けない……。

「……昨日のことって？」

「——昨日、穂乃香は俺の腕の……。」

「ぎゃあゝつ、や、止めてくださいっ。課長——！」

再びタオルケットの中に身を沈めていく穂乃香に、越野はタオル

ケットをがばつと剥いだ。

「穂乃香。昨日俺のこと名前で呼ぶように言った筈だよ？」

無理やり出さされた穂乃香の眼には、嬉しそうに笑う越野の顔が映った。

「なつ、名前で呼ぶって…。」

昨日のことなど全く覚えていない穂乃香としては、何のことだか当然全く分らない。

「俺は、付き合う気のない女性とはベツトを共にしない主義だ。

穂乃香にも何度も昨日のうちに言及したはずだけど？」

「——付き合うだなんてっ。そ、そんな事言うわけないですよ！——」

「そんな事言うわけないってなんで、言い切れるのかな？——覚えてないんだよね？」

「——そ、そりやそうですけど…。」

「じゃあ、俺の言うことが嘘だといえる確証はないわけだ。」

おずおずと頷く穂乃香に、越野は悪戯っぽく微笑んだ。

「じゃあ、俺の言うことが正しいってわけで、いいんだよね？」

反論しようとする穂乃香に神々しい笑顔を向ける。

「ってことで、穂乃香は俺を名前で呼ぶんだよ？」

「そ、そんな…。」

「穂乃香は俺の言うこと否定できないだろ。それに対して俺は穂乃香と付き合うことになったと断言できる。つまり俺たちは付き合うことになったって言うことになる。」

「——そ、そんなっ。覚えてないときのことを言うなんて、横暴です！——」

「へえ？じゃあ穂乃香は、覚えてないからといって約束を反故にしているって思ってるわけだ？」

そう言われると反論の仕様がなない。

「——それは、思っていないですけど……。」

「じゃあ、決まりだ。それから、俺のことは『暁』と呼ぶように。」

「へ？」

「へ？じゃなくて。俺たち付き合っているのに会社の外でも『課長』と呼ばれるのは俺は気に食わない。仕事とプライベートを分けないヤツは、俺は嫌いだよ。」

「で、でも……。」

「でも、じゃない。言ってみて？」

「えつと……。『暁』…さん？」

「『暁』だ。」

「『暁』——さん……。」

「穂乃香っ——！」

「——だ、駄目です。言えないですっ。」

「——わかった。仕方ない。暁さんで我慢しよう。……それより朝食にしよう。着替えたならリビングにおいで？」

「分かりました。」

そう返事をする穂乃香に越野はかすかに眉間に皺を寄せた。

「それから、敬語はやめるように。なんと言っても俺たち付き合ってるわけだしね。」

「は、はいっ。——じゃなくて、うん。」

『はい』と言ったところでにらまれた穂乃香はにらんできた越野をみてすぐに言い直した。

「いい返事だ。じゃあ、早くするんだよ？」

極上の笑顔を見せて、越野は寝室をあとにした。

部屋には今一事情が飲み込めないまま、呆然としている穂乃香の姿があった。

（つて「はい」じゃ、ないよぉ）

促されるまま返事をした穂乃香だが、暁が出て行った途端、はつと我に返った。

「なんで、恋人同士なのよ?!——たとえ、たとえ課長が言ったようなことが本当に会ったとしても…」

自分では全く記憶にないので、そんなことがなかったと言い切れない穂乃香はちよつとだけ弱気になってしまう。

「でも、でも。もし、万が一そうだったとして、万が一だけど。

——そうだったとしても、私と課長が付き合う必要なんてないじゃない?!」

そうだよな？

当惑気味に自分に問いかけるのは、あまり昨日の自分のやった行動に自信がもてないからだろう。

分かっているのは昨日飲み過ぎたことと、今の自分が置かれている状況だ。

（裸で課長のベットのの中にいるってことは、やっぱりそうなのかな…?）

そう思うと自分自身で凹んでしまう。飲んだ上でのこととはいえ…。

「何で覚えてないのよ?!」

そう叫ぶと穂乃香は大きなため息をつく。

（——今更、どうしようもない、んだよね…。）

ここでいくら悩んだとしても、一向に答えは出てこない。

「着替えよつか…。」

これ以上悩んでも無駄なことは今は悩まない。

どうやって思い出そうとしても、どうせ思い出せやしないのだ。

穂乃香はそう結論づけると、穂乃香はそうそうに次の行動へと移っていく。

（だって、どうせあの課長だもん。きっと冗談だっていいそうじゃない？）

そう自分に納得させたのだった。

「——おはよう、ございます。」

寢室を出た穂乃香は、すぐ隣にあるリビングの戸をそろそろと開けて小声で挨拶をする。

さつきは起きたばかりであの状況だったため、はつきり言って挨拶どころじゃなかったのだ。

「おはよう、穂乃香。ちゃんと着替えてきたんだね。」

頬をほころばせて、だが少し残念そうに話しかけてくる暁に穂乃香は虚をつかれたように黙り込む。

「——穂乃香？どうしたんだい？さあ、早く座って。」

左手にフライパン、右手にフライ返しを持ったまま笑いかけてくる暁に、穂乃香はただこくと頷いた。

（誰？コレ？）

先ほどの暁とはまた一味ちがう様子に、穂乃香はただ戸惑うばかりだ。

「あ、あの…。課長、手伝うこととかは…？」

「——『暁』、だよ。仕事の時にはよく働く頭は、日常生活では覚えが悪いのかい？」

先ほどのやわらかい雰囲気が一気に硬化する。まるで部屋の中が10 は下がったようだ。

「——か…。」

もう一度繰り返し返そうとする穂乃香に暁はフライパンとフライ返し

を置き、ゆつくりと穂乃香のほうに近づいていく。暁のただならぬ様子に一歩一歩後ろに下がる穂乃香だが、あつという間にリビングの壁にまで追い詰められた。

「もう一度、ちゃんと教えなきゃいけないようだね。」

ぼそつと呟く暁の言葉を穂乃香がちゃんと理解できるかどうかという瞬間に穂乃香の顎は右手でクイッと持ち上げられた。

穂乃香が何かを言うまもなく、無防備なその唇の上に暁のそれがそつと重ねられた。

何が起こったのだ？

わけが分からないまま眼を見開く様子に暁の瞳は意地悪な光を放つ。

——はじめは啄ばむようなキスが深く重ねられていく。息が苦しくって少し唇を開けたその隙をぬって暁の舌が征服するように穂乃香の口の中を我が物顔で縦横無尽に征服していく。

「——んっ。」

気を抜いたらすぐにへたり込みそうな彼女の様子に暁の右手が穂乃香の腰に回されしつかりと抱きしめた。ややためらっていた穂乃香の両手はやがて暁の首に回される。

その様子に暁は満足そうに微笑むと、穂乃香の唇にちゅつと小さな音を立ててゆつくりと腰にまわしていた手を離す。

「？」

「今はこれ以上は駄目だよ？朝ごはんを食べてから続きをしよう。」

その言葉に、とろんとしていた穂乃香の瞳に一気に羞恥心が浮かび上がる。

「——や、ヤダ……。」

そう呟いて下を向く穂乃香の肩を暁は笑いをかみ殺しながら先ほど指し示したテーブルのほうに導いた。

「ここでもいい子で待っておいでくれるね？」

穂乃香の返事を待たず、暁は手早く朝ごはんの用意を再開する。背中越しに感じる戸惑った穂乃香の視線に、暁は小さく笑うとそのまま朝食の支度を続けていく。

やがて暁の力作がテーブルの上に並んだころ、穂乃香のほうも自分の置かれた状況を分らないながらも自分の中で消化できたのか、先ほどのやや戸惑った様子もなく、テーブルについていた。

「さあ、食べようか？」

穂乃香が戸惑った様子もなく座っているのを見て暁が満面の笑顔を浮かべている。

「はい、課長。」

「——穂乃香？」

何度言っても『課長』という穂乃香に暁は少し怒った表情を見せる。

「……うつ。暁さん。」

「いつまで間違うんだい？ 今度から間違えたらペナルティを与えることにするよ？」

「ぺ、ペナルティ?!」

「そう。穂乃香が俺を『課長』って言うたびに1ペナルティ。で、10個たまったら穂乃香から俺にキスするんだよ。いいね？」

「そんなこと…。横暴です!!」

「穂乃香が間違えなければいいってことだろ。——それとも、自信がないのかい？」

挑戦的に眼を細める暁に思わず言い返してしまう。

「大丈夫です!! 受けて立ちますっ。」

その言葉を待っていたかのように、意地悪そうに笑う暁に穂乃香は思わず両手で口を押さえる。

だが言ってしまった言葉はもう取り消すことはできない。

「楽しみにしてるよ？」

暁はこの言葉を後悔している穂乃香をよそに、自分の作った朝食

に手を延ばすのだった。

あれから1ヶ月が経った。
会社ではただの上司と部下。
私生活では恋人同士。
そんな微妙な関係がまだ続いていた。

「橘君、ちよつと。」

先ほど提出した書類に眼を落としたまま、暁は眉間にしわを寄せ
て穂乃香を呼び出す。

穂乃香の席から少し離れている暁だが、そこからも十分彼の怒り
が伝わってくる。

「穂乃香？大丈夫？」

視線を上げると友人の真紀がやや心配そうに問いかけてくる。今
月になってから何回か、穂乃香にしては珍しい初歩的なミスが目立
っているのだ。それはもう周知の事実で、暁が穂乃香を呼びつける
たびに、同じ課のほかの人たちが周りに分らないように耳をふさ
ぐ光景が見られる。コレは今では当たり前前の光景になりつつもあつ
た。

ある者は面白そうに、またある者はそれが当たり前前の光景のよう
に、二人の様子をそつと見守っていた。

「——はい、課長。」

イヤだなという表情を前面に出しつつ、おとなしく課長席の前に
歩いていく。その足取りは当然のように重かった。

「——この文章、ちゃんと読み直してから提出してくれただ
よね？モチロン。」

眉間のしわは、ここ最近毎日のように彼の顔に浮かんだままだ。
視線は零下を思わせるほどに冷たい。

「え？はい。」

素直にこくと頷く穂乃香に暁の眉間のしわがまた少し深くなつた。

「君は『私達自身』を『私達自信』と書いてるみたいだけど？」
この一ヶ月で何度言わせるんだ？

そう言っている視線が穂乃香の顔に落とされた。

ご丁寧に指摘の場所に赤ペンでチェックがされた書類が穂乃香の前に差し出された。

「——あ……」

今までの穂乃香だったらありえないミスだ。

仕事か丁寧かつ的確。

何もやらせても完璧にこなすはずの穂乃香にしては、珍しい凡ミスだった。

「——す、すみません……」

小さな声で謝罪の意を伝える穂乃香に、暁はため息さえもついてくれない。

「ってことでもう一度最初から書類を見直してくれるかい？」

柔らかな物腰のまま穂乃香に書類をつき返した暁は、自分の仕事に没頭するがごとく手元の視線に再び視線を落とした。

「すみません。すぐ訂正します。」

そう小さな声で答えた穂乃香はすぐごと自分の席へと戻っていった。

暁はその言葉を聴いているのかいないのか、視線を上げることなく生返事を返すだけだった。

「ねえ、穂乃香。——本当に大丈夫？」

今までの穂乃香では考えられないような初歩的ミスが続いている。そのことに心配した真紀がそつと問いかけてきた。

「……うん……」

やや気落ちした穂乃香の様子に真紀はますます考え込むように穂乃香を見つめる。

この1ヶ月。何度も二人の間でやってるやり取りだが、穂乃香が何か失敗をするたびに気にかけて声をかけてくれる真紀の存在は本当にありがたかった。だからこそ、暁とのことを話す勇気がない自分が齒がゆくてならないのだ。

ちよつとした様子の違いにすばやく気づき、心配してくれる親友に穂乃香は思わず口元をほころばした。

「とりあえず、コレしちゃうなきゃ…。」

あまり気の進まないように小さくため息をつくと、先ほど提出した書類に眼を通していく。暁が指摘したほかにも自分の間違いを見つけて赤ペンで訂正する。

「——午前中、コレだけで終わってしまいそう…。」

思うようにはかどらない自分の仕事の予定に大きなため息をつくと、今度はPCを立ち上げて訂正を加えていく。

暁と付き合うようになってから、浮かれているわけでもないのにこんな風にミスをしてしまうようになった自分に心底嫌気が差してくる。

（いままで、こんなことはなかったのに…。）

そうなった原因も本当は分かっている。

——あれから1ヶ月。

——暁と付き合い始めて1ヶ月が経過したのだ。

（せっかく同じ部署で働いているのに…。）

そう心の中でそつと呟いた。

付き合い始めてからようやく、暁が女性社員にどんな眼で見られているのかを知った。

暁自身がそういうことを嫌がっているのが分かっているので、表立って暁にアプローチしてくる人間はそうはいない。

だがそれでも穂乃香が知っているだけでも10人は暁に猛アタックして敗れ去った。そして少なくともその3倍は暁に好意以上の視線を送り続けているのが分かる。

だが彼と付き合っているはずの穂乃香はそんなそぶりを見せることはできない。

何度も何度も暁と話し合ってきたのだ。

暁としては二人の関係を表ざたにしたいと望んでいたのだが、それを頑固としてそれを受け付けなかったのは穂乃香自身である。

穂乃香としては公私混同を避けたいというのがその要因だが、今から考えたら公表していたほうが良かったかもしれない。

そうすれば少なくとも、

「私の暁さんにそんなに近づかないで。」

と正面をきって言えるからだ。

だが実際は、公表をしていないために、他の女子社員が近づいたところで何も言い返されないのだ。

このことは真紀にだった話していない。

例の一件があつたときに、『高志とは別れた』とそれだけしか報告していないのだ。

本当はそれだけじゃなかった。

だが、あんなに毛嫌いしていた暁と付き合うようになったというに、穂乃香の中でどこかためらいがあつたためだろう。

モチロン、真紀を信じていないわけじゃない。もし自分と暁の関係を話すとしたら一番に真紀に話すだろう。

（あゝあゝ。何やってるのかなあゝ。）

そんな埒もないことが頭の中によぎる。

暁が自分以外の女子社員としゃべっているのを見るたびに、もやもやした思いが自分の中に生まれてくる。

（——こんなはずじゃなかったのに。）

少なくとも付き合う前から付き合い始めのころから、こんな風に暁の周りに女子社員がいっぱいいるのは見てきたし、それで不快感など感じたことなど一度もなかったはずだ。

暁に対する自分の対場が変化しただけ。

ただ、それだけなのに…。

——こんなに嫉妬を感じるだなんて…。

そう自分を叱咤しても一度生まれたもやもや感は消えることはなかった。

（こんな自分なんて大っ嫌い！！）

ついこの間まで付き合ってきたはずの高志にさえ感じたことのない思い。

このはじめての感情に対し大きな戸惑いを覚える穂乃香だった。

そんな穂乃香を心配そうに見つめる視線とうれしそうな光をたたえた視線が互いを交差する。

穂乃香はそつとため息を吐くと、それらに気づくことなく先ほど暁から指摘された部分を変更すべく机に向かうのだった。

「ねえ、私に何か報告することない？」

この間から延び延びになっていた真紀との夕食の席で、穂乃香はそのふいの問いかけに思わずむせってしまった。

「な、何よ？急に……。」

「だから、私に報告すること、最近なかった？」

「——た、高志君と別れたこと？」

「違うわよ。それは前にも聞いているじゃない。」

「じゃ、じゃあ、——この間真紀が行きたいって言ってたライブにほかの友達で行ったこと、とか？」

「へえ？そうなんだ??」

「……ち、違うの？」

恐る恐る尋ねる穂乃香に真紀はにんまりと笑って見せた。

「——こ、し、の、か、ちょ、う」

「へ？」

突然の暁の名前に、穂乃香は今まさに食べようとしていたパスタがポタンと音を立てて皿の上に落ちる。

「『へ?』じゃないわよ。——何かあったでしょ？越野課長と。」

確信ありげに話す真紀に対し、穂乃香の方はやや慌ててしまう。

「なっ、何かって?」

「あのね、穂乃香。伊達にあんたとこんなに長く付き合ってるわけじゃないわよ。——それとも、そんなに私には言えないの？」

「だっ……。」

「『だつて』じゃないわよ。それとも、そんなに私のことが信用できないの？」

そう真紀に言い返されると、ごまかすことなど出来る訳がない。

「……そんなこと、ないけどさ。」

「付き合ってるんでしょ？越野課長と。」

真紀の言葉に穂乃香はかすかに頷いた。

「やっぱり、ね。」

そう断言されると、周りにもばれているのかと心配になってくる。

「大丈夫よ。気付いているの、私だけだと思うから……。」

そこは穂乃香と長いつきあいの真紀だ。穂乃香が何も言わなくてもいい事はすぐに分かるというものだ。

「な、なんで分かったの？」

「穂乃香の様子と課長の穂乃香を見る眼、かな？」

真紀の言葉に穂乃香は思わず顔を赤くする。

（そんなにあからさまなのかしら……。）

「よく観察してないと気付かない程度だけだね。——でも、いつからなの？」

それを話すまで帰さないという形相に、穂乃香は観念して話すことにする。

「……えっと……。高志くんに振られたときから、かな？」

「高志くんには？」

実は常々、真紀は穂乃香に対する高志の言動には呆れ果てていたのだ。その上、高志の浮気はずいぶん前から知っていたのだ。真紀の彼氏である亮からも聞いていたし、実際に高志が他の女性と腕を組んで歩いている姿も見たりもしていた。

だから、穂乃香が高志と別れたと聞いて、本当によかったと心底思っていたのだ。

「でも、なんで？高志くんに振られたときからっていうのはどういうことよ？」

穂乃香は真紀には簡単に『高志に振られた』としか告げていなかったのだ。

「——実はね、……。」

穂乃香は一息つくと、高志に振られたときのあらましとその後のことを簡単に説明する。

（——やるわね、越野課長…。）

真紀は前から、穂乃香には高志よりも暁の方がいいと思っていたのだ。勿論、暁が穂乃香を好きだったことは前々から気付いていた。だからこそ、事あるごとに穂乃香の前で暁を褒めていたのだ。

「で、このことは会社の人たちには内緒なんだ？」

「う、うん。課長は話しても良いって言ってくれたんだけど、ほら、越野課長って結構人気があるじゃない？だからやっぱり、さ…。」

「だから最近元気がないんだね。」

「え？そんなことないよ！！」

「あるわよ。仕事中も気もそぞろだしね。——最近、いつになくケアレスミスが多いじゃない、穂乃香は？」

「あ、あれは…。」

「社の女の人が課長に馴れ馴れしく話しかけているのを見た後とかにやってるでしょ？」

「……。」

「ほら、やっぱりそうじゃない。嫌なんですよ？」

「う、うん…。」

観念したように頷く穂乃香に真紀は小さくため息をつく。

「いっそのこと言っちゃえば良いのに。『越野課長は私のものです！』って。」

「『私のもの』だなんて…。」

「だって、嫌なんですよ？」

そう畳み掛けられると、穂乃香の方は素直に頷くしかない。

「でも、やっぱり言えないよ…。」

「何で？」

「だって、さ。前に、会社の人に公表するって課長が言ってくれたのに、嫌だって言ったのは私なんだもん。それなのに今更みんなに言いたいって言うのって私の我俣じゃない？」

「じゃあ、このまま課長の周りに女の人がいっぱいいるのを黙っ

「て見ているってわけ？」

「――。――」

「そう言われると、穂乃香としてもそれはやっぱり我慢できないのだ。」

「まあ、良いわ。ゆっくり課長に相談してみてもいいんじゃない？」

「う、うん。」

「やや気が進まない様子だが、一応穂乃香が頷いたことで真紀はうれしそうに微笑んだ。」

そして二人の話題はそのまま、暁と穂乃香の話から逸れていった。

「——喉、渴いた…。」

そう呟いて、穂乃香はそつと瞳を開けた。

自分の視界に安心しきって寝ている暁の顔が入ってくる。心底安らいだ表情をしていてくれるのがなんとなく嬉しい。

（もう、一ヶ月。だよな…。）

そんなことが穂乃香の脳裏に浮かぶ。

穂乃香と暁が（半ば騙されるように？）付き合い始めて、1ヶ月が経過した。

付き合い始め当初、暁は『穂乃香がその気になるまでは絶対に抱かない』と明言したのだ。だから、穂乃香はまだ暁とまだ肌を合わせていない。勿論、付き合いきつかけとなったあの夜には肌を合わしているのだろうが、穂乃香は酔っ払っていてまったく記憶にないのだ。

つまり、穂乃香的にはまだ、「プラトニック・ラブ」というとこだろうか…。

（ふふっ。なんか大事にされているみたいで嬉しい。）

いままで付き合い合ってきた男性たちとはまったく違う扱いに、穂乃香の心はくすぐったくなる。

ただ、彼が唯一主張するのは、『穂乃香は週末は、俺と過ごすように』とのことだった。彼の主張によると、自分は穂乃香の彼氏なのだから、穂乃香は金曜日の夜から暁のマンションに泊まるのが当たり前、なのだそうだ。

そして、二人で週末をこの暁のマンションで過ごし、夜は当然のように穂乃香を大切そうに抱きしめて眠るのだ。

穂乃香は自分をまるで宝物のように抱きしめてくれている暁の

（たとえば、こんな無防備な顔とか、ね。）

暁と付き合うようになって1ヶ月。

穂乃香はそれまで知っていた暁の会社での顔が、本当は「誰にでも優しい」のではなく、「誰のことも大切にしていない」からだと確信している。

他の誰も特別ではないから、誰かを怒るほど大切ではないから、「誰にでも」優しくしていたのだ。

暁は付き合うようになってから、他の誰よりも穂乃香の提出する書類を丁寧に添削するようになった。それはそれほど顕著ではないので周りの社員たちは気付いていない。でも、それは彼の会社での精一杯の愛情表現だと思っている。

「じゃ、ちょっとだけ行つて来るね？」

穂乃香は静かに寝息を立てている暁の様子を伺い、彼が完全に寝ていることを確認するとその頬にちゅっとキスをして彼の腕から抜け出した。

「えっと、水でいいかな…。」

穂乃香はもう今では見慣れたキッチンに入っていく。

（———なんか、初めてきた時と大分変わったよね…。）

そんな埒もないことを考えてしまう。

穂乃香がふと見回したキッチンだけでも、随分様変わりしている。

一人用の食器しかなかったのに、穂乃香専用の食器が置かれているし、調味料もこの1ヶ月で倍は増えている。

フライパンもお鍋も何もかもが1ヶ月前の時よりも確実に増えた。穂乃香が土曜日や日曜日などに手料理を振る舞い、暁もそれを喜んでくれているからだ。

「———なんだか、嬉しいかも／＼。」

気がついたらそんな言葉がこぼれていた。こんなことは多分、些細なことなんだろうけど、この暁のマンションに確実に穂乃香の存在すべき場所が少しずつ出来ていく様子を見ると、すごく幸せに感じるのだ。

「ふふっ。」

「何をそんなに楽しそうにしているんだい？」

そう呟かれる言葉とともに、穂乃香の首に暁の腕が廻された。

「あ、課……、じゃなかった。」

「今、間違っって『課長』って言いかけた、よね？」

さつきまでおとなしく閉じられていたその瞳には、意地悪そうな光が浮かんでいる。

「最後まで、言ってないです……！」

「『最後まで』ってことは、言いかけたことは認めるってことだよな？」

「———うっ。」

何も言い返せない穂乃香に、暁は嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ、罰ゲームだね。」

そう言っって暁は自分の唇を指す。

「でも、言ってないじゃないですか?！」

「言いかけたのは事実だろ? だから、罰ゲームに相当するよ。」

「———っ。」

まだ行動を起こさない穂乃香に、暁はじゃあ、と一つ提案をする。

「穂乃香から俺にキスをするのが恥ずかしいなら、俺からしても良いよ。———ただし、その時はすっごく濃いのを、ね?」

「?!」

「せっかくだから選ばせてあげるけど?」

嬉しそうに持ちかける暁に、穂乃香は真っ赤に頬を染める。

「——目をつぶって、屈んで下さいっ。」

「えー、俺からしてあげても良いんだけど……。」

残念そうに呟く暁に穂乃香は小さな声でお願いをする。

「早くつてば——!」

恥ずかしいことはさっさと終わらせてしまいたいとばかりに急かすと、暁のほうは諦めたように素直に穂乃香の言葉に従った。

ちゅっ。

小さな音が静寂なキツチンの中に響く。

「——もう終わり?」

残念そうな暁に穂乃香はさらに頬を赤らめた。

「もう終わりです——!」

「さっきは頬にキスしてくれたからね。今日はこれで許すよ。」

にんまり笑う暁の言葉に、穂乃香は耳まで真っ赤に染める。

「——なっ?! いつ?!」

「起きてたよ、最初から。」

「じゃあ、何で寝真似なんてノノ。」

「それは勿論、穂乃香がどんなことをしてくれるかなって思っ
てね。」

「!——」

「でも、まさか頬にキスしてくれるなんて思わなかったよ?」

「ノノノノノノ!!」

満足げに微笑む暁の腕がゆっくりと背中に廻された。

「さあ、行こうか?」

悪魔的に微笑む暁と、彼に抱きしめられたままこれまで以上に

頬を染めた穂乃香は、リビングの奥の寝室へと戻っていった。

「もしかして、まだ怒ってたりする？」

朝食の間無言を通している穂乃香に、暁が面白そうに問いかけた。

「何がですか?!」

そう応える穂乃香の声が若干、刺々しい。

「昨日の夜のことだよ。穂乃香が水を飲みに行く時に寝まねをして…。」

ご飯をすくっていた穂乃香の手がふと、止まる。

「『昨日の夜』じゃなくて、『今朝』だと記憶していますが?夜中の12時を過ぎていたんで。」

バツサリ。

これはもう、今までにないくらい怒っているようだ。

「じゃあ…。明朝、穂乃香が水を飲みに行く時に寝まねをしていて、君が可愛く俺の頬にキスしてくれたのを密かに喜んでいたという一連の出来事だよ。」

「!」

もうそう言われるだけで穂乃香は真っ赤になる。その後起こったことまですっかり思い出してしまったからだ。

向かい側の席で、寂しそうに穂乃香の瞳を覗き込む。

「ノノノ。そ、そんなこと、声に出して聞かないでください!

」

「愛する穂乃香が怒ってるなら、『そんなこと』じゃないじゃないか。」

「言ってて恥ずかしくないんですか?」

最近、少しは慣れてきたのか、穂乃香も多少反論できるようになっている(ただし、顔を真っ赤にするところは変わってはいないが…。)

「別に。本当のことだから。——それより、さっきのことだよ。怒っているのか？」

瞳を見つめられたまま、真剣に問いかける暁に、穂乃香はふいつと視線をそらせた。

「——ってません。」

「え？聞こえないケド？」

「だから、怒ってませんってば！！」

穂乃香の返答に暁はしばし、考える。

「じゃあ、ただ、恥ずかしかっただけってわけ？」

「／／／／／／／／。」

「だって穂乃香の意思で俺にキスをするなんて初めてだものね？」さらに穂乃香の瞳を覗き込んで畳み掛ける暁に、穂乃香はさらに首を横に向ける。勿論それは恥ずかしいからで、暁には当然のことくもろバレである。

「そうそう。それに俺に初めて君からキスをしてくれたんだっけ？この唇に。」

追い討ちをかけるように、暁は嬉しそうに自分の唇を指差した。

（——ぜったいたい、分かっててやってるわ！！）

いくら天然の穂乃香でも、そんなことくらい察しはつく。このままではいつまでたっても、からかわれるばかりだろう。

（そうはいくものですか！！）

「そんなはしたない子は、暁さんは好きじゃないですよね…。私からもう２度としないでお願いしますね。」

これならどうだ！！とばかりに反論する。

昨日と今朝の様子からいくと、暁がすごく嬉しそうにしているのは明白であるから、多少効果があるかもしれない。

きよとん。

はじめは今一穂乃香の言うことが理解できない暁であったが、その直後にはにつこり笑って言葉を紡ぐ。

「そんな穂乃香も大好きだけど、まあ、穂乃香がはしたないって

俺に想われるのがそんなに嫌なのなら、今まで以上に頑張るしかないかな。」

「『今まで以上に』?」

「そ。今まで以上に、ね。」

この上なく嬉しそうに笑う暁に、穂乃香の箸が止まる。

「え?」

(——な、なんか思ったのと違うところに話が進んでる?)

「何がですか?」

「だから、穂乃香からキスをするのがはしたないと思わないくらいに、頑張るって事。」

そう言うなり、暁はテーブル越しに穂乃香の唇を捕らえる。

「!!」

いきなりの暁の行動に穂乃香はびっくりしたように目を見開くが、暁の方は全く気にした様子もなくもう一度唇を重ねる。

くちゅっ。

穂乃香の唇の間をぬって暁の舌が口の中を蹂躪する。

「……んっ。」

はじめは嫌がるようなそぶりを見せていた穂乃香だが、次第に暁の口付けに屈する。

思うがまま、至極自由に動き回っていた暁の舌は、そのまま何度も何度も、穂乃香が自分のものであるように主張し続けた。

「!!」

暁の唇はやがて、そつと穂乃香のそれから離される。

その直前。

下唇を甘噛みすることも忘れない。

「／／／／／なっ。」

「これで、穂乃香も昨日くらいのこと俺が君をはしたないと思うわけがないって分かってくれたよね?」

「——。」

突然のあまり、咄嗟に声の出ない穂乃香に、暁が悪戯っぽく笑う。

「あれ、分かんなかった？——じゃあ、もう一度……」

テーブルの上に身を乗り出した暁に対し、我に返った穂乃香は、自分の口を慌てて両手で覆う。

「わっ、わかりましたっ。」

「そうかい？」

至極残念そうに呟く暁に、穂乃香はぶんぶん大きな音が立つくらい大げさなそぶりで首肯する。

「じゃあ、これから穂乃香からのキス、楽しみにしているよ？」

そうにつこり笑う暁に対し、穂乃香が相手に気付かれないようにそつとため息をついた。

（私が恥ずかしがっているのを知っているのに。——悪魔だわ……。）

付き合うようになって分かってきた暁の性格の悪さに、辟易する穂乃香であった。

だが、それでも……。

暁のことが嫌いになれない穂乃香だった。

（もう、ぜーったい、絶対。口利かないもん！！）

今朝のやり取りですっかり機嫌を損ねた穂乃香は、洗物を済ませた後、一目散に寝室へ入るなり鍵をかけた。

（確かこの寝室。外からは開けられないはず！！）

前にちらつと暁がそんなことを言っていた気がする。

だからこそ、この寝室に逃げ込んだのだ。

「——穂乃香？」

いつものとおり、食後の後片付けを済ませたらそのまま自分いるリビングに来ると思っていた暁は、寝室に駆け込んだ穂乃香にびっくりして後を追ってきたのだ。

コンコン。

「穂乃香？どうかしたのか？」

「……………」

ドア越しに声をかけるが返答が返ってこない。

コンコンコン。

「おいっ、穂乃香？！聞こえているんだろう？」

「……………」

さらに沈黙、である。

ドンドンドンドン。

「穂乃香！！」

多少苛立ちまぎれに怒鳴る暁の言葉に返答があったのはそれから5分たったところだった。

「今日は、暁さんとしやべらないもん！！」

ぼそぼそと、暁に聞き取れるか聞き取れないかというようなか細い声が返ってくる。

「穂乃香？」

先を促すような暁の言葉に、穂乃香はさらに続けた。

「今日の暁さんはとっても意地悪だったじゃない。だから絶対口利かない!!」

まるで子供の言い分、である。

「穂乃香。子供じゃないんだから…」

「どうせ、28才の暁さんから見たら、22才の私なんて、子供ですっつ。」

そう言っただけ、穂乃香はどんなになだめても部屋から出てこなかった。

(——参った…。)

何度呼びかけても、天岩戸よろしく一向に出てくる気配がない。
(ちよつと悪ノリしすぎたかな…)

暁はリビングのソファに深く腰をかけて大きくため息をついた。
実は暁は、普段の穂乃香からは想像できないほど甘えてきたり、今回のように突然子供のような態度をとる穂乃香を決して嫌いではない。いやむしろ、そんな自分にしか見せない姿を見せる穂乃香がとっても気に入っていたりするのだ。

ただ、なだめてもすかしでも怒ったまま寝室に閉じこもるという行動に出られるとは思ってもみなかったのだ。

(せいぜい、リビングにきてむくれる位だと思っていた。)

見通しが甘いといえばそれまでなんだが、それはそれで穂乃香が甘えてくれているというわけで嬉しいと感じる自分も存在するわけ…。

「——溺れてるな…」

そんな言葉がつい口をついて出てくる。

これが穂乃香以外の女だったら、寝室になんか閉じこもった時点で、とつくにマンションから追い出していただろう。それなのに同じことをするとしても、相手が穂乃香だとそれが『甘えてくれている』と捕らえてしまうのだ。

これは『溺れている』以外の何者でもないだろう。

——だが、このまま無為に時間を過ごすわけには行かない。

それが正直な暁の感想だ。

まだ今日は土曜日だが、明日が終わればまた一週間。穂乃香は暁のただの部下に戻るのだ。

（いつそ、公表できたら・・・。）
と思う。

実は穂乃香は同会社の男性社員の間では密かに知られた存在だったりする。少なくとも暁の知っている範囲で3人は穂乃香に思いを寄せているのだ。それも遊びとかではなく…。

容姿はずば抜けていいわけでは決してないのだが、穂乃香のかもし出す雰囲気と彼女の気立てのよさが、実は密かに男性社員に好感を持たせているのだ。それも真剣に…。

だから、今回付き合うことになった時、暁はすぐに公表したかった。そうしてある意味、不特定多数の男性陣にけん制してやりたかった。だが、『出来たら内緒で…』と言われたとき、初めは暁もいい顔をしなかった。

頭の中で『公表しない』知られてはまずい人間がいる？』という図式がふと頭の中によぎったからだ。

だがよくよく考えてみると、それほど悪い話ではないことに気がついた。

穂乃香との間が公表されれば、必然的に穂乃香の部署移動は避けられないだろう。

いくら社内恋愛にオープンな会社であっても、恋人同士の男女

を同じ部署に置いておくほど寛容なことはない。

現に、暁の同期のヤツも社内恋愛が公表されたたん、彼女のほうで部署を移動させられたのだ。

その点。今のままだと、公表できない代わりにいつでも穂乃香は自分の近くにいるし、ノコノコやってきた男どもを追い払うことが出来るのだ。損して得をとれとはこの事だ。

とも思う、のだが…。

今はそんなことどうでもいい話だ。

それよりも急を要するのは…。

（どうする？このままでは貴重な穂乃香との時間が…。色々手はある。）

例えば部屋の前に陣取って穂乃香がトイレか何かで寝室に出てくるのを捕まえる。

——嫌、それだといつになるか分からないな…。

例えば今日のことを謝る。

——これも却下だ。ここで謝ればきつと許してはくれるだろうが、これからはあんなふうに穂乃香をからかうことが出来なくなる。（穂乃香をからかうのは、ある意味暁からの愛情表現だったりする。穂乃香にとっては迷惑なことこの上ないが…。）

そうなると…。

暁はリビングの引き出しからとあるものを取り出した。

キラリ。

窓の隙間から入る日差しが、暁の手の中にあるものを鈍く光らせた。

がちゃ。

穂乃香が閉じこもって30分。

暁は手に持った寝室の鍵でそつと部屋の中に忍び込んだ。

（おや？）

その寝室のど真ん中に位置するベッドには穂乃香の姿は見当たらない。かといって、穂乃香が部屋を出ていないのは、暁がずっと寝室の入り口に注目していたので間違いない。

（どこだ？）

陽がさんと降り注いでいるこの部屋には一見、暁以外に誰もいないように静かだ。

だが、ベッドの脇。

入り口からはやや死角になる位置で暁が穂乃香用にと買ったピンのクッションを抱いて、彼女はいた。

——但し、起きてはいなかったが。

よほど怒りつかれたのであろう。

クッションを抱いて健やかに眠る穂乃香に、暁は思わず苦笑をする。

（俺をこんなにやきもきさせて、自分はしっかり寝てるんだから、な。）

そう思うと、穂乃香は思わず苦笑してしまう。

なんののかんと言って、穂乃香に惑わされている自分の姿がおかしく思えるのだ。

今まで、全く女性と付き合ったことがないわけではない。

と言うより、きつと普通の男性の平均よりは若干多いかもしれない。と自負している。

学生のころから人当たりがよく、容姿も学歴も良かった暁は、はつきり言って自分から女性に行動を起こしたことはない。

何もしなくてもあちらから寄ってくるからだ。

そして寄ってきた女性のなかで自分が好ましいと思った女性と適当に付き合ってきた。しかも、別れてもすぐ次の女性が現れる。はつきり言って会社で穂乃香と出会うまでは、女性に事欠かない生活をしていたのだ。

自分の本当の姿を知る仲のいい友人たちからは、

「お前、絶対世間を騙してるよな。」

「いい加減、そんな中途半端な付き合いはやめろよ。」

「毎回、会うたびに違う女を連れてくるから、お前に紹介される度に、その女がかわいそうになるよ。」

等々、言われ放題だ。

はつきり言って自分からモーション（死語）をかけたのは、穂乃香が初めてだった。

（こんなに大切にしているのだから…。）

そんな自嘲する言葉がふと頭の中によぎる。

今まで付き合ってきた女性のなかで、こんなに手を出さなかった女性はいなかった。

その為に付き合っているのだから…。

暁はそれが当たり前だと思っていたのだ。

だがしかし。

穂乃香の場合はちよつと違うのだ。

（大切にしてやりたい。）

彼女の顔を見るたびにそんな風に思ってしまう。

暁は、ベッドの脇でクッションを抱えたまま眠る穂乃香の身体をそつと持ち上げると、ベッドの上に移し、上からそつと毛布をかけてやる。

「大切、なんだよ。穂乃香。」

分かっているのか？と言わんばかりに耳元で囁く暁の声が聞こえたかのように、穂乃香はベッドの中で幸せそうに微笑んだ。

「ふっ。」

こんな風にまるでお姫さまを守る騎士のごとく穂乃香を大切にしている今の自分の姿を見たら、気の置けない友人たちはどんな反応を見せるのだろうか？

そんな問いがふと自分の中に生まれてくる。

（まあ、まだ奴らには会わせないけど、ね。）

本当に心身ともに自分のものだと言張できない今は、友人になど会わせるだなんてことは全く持つて考えられない。

それくらい、大切な失うことの出来ない存在なのだ。

無理やり付き合うことになったと多分穂乃香は思っているだろう。

（——俺が穂乃香と二人きりになってくどくチャンスを探っていたなんて、思いもなかっただろうな。）

暁は穂乃香が自分の部署に配属された時から、穂乃香の事を好きになった。

いわゆる『一目ぼれ』と言うヤツである。

だがそれは、彼女の容姿に惹かれたわけではない。

もちろん、穂乃香もそれなりにきれいな容姿をしている。いや、きれいというよりもむしろかわいいと言ったほうがいいのかもしれ

ない。

とはいっても、穂乃香以上にかわいい容姿の女性やきれいな女性といやというほど付き合ってきたのだ。

容姿が中身と決して比例しているわけではないことは、自分を例にたとえても分かるだろう。

穂乃香の純粋な心。

それに惹かれたのだ。

勿論、そのことに気付いていたのは暁だけではない。

他に穂乃香の気付かないところで穂乃香に手を出そうとしていた男性たちをことごとく撃退して、密かにチャンスを待っていたのだ。

そう。

穂乃香が高志に振られたあの日。

絶好の機会が訪れたって訳だ。

（——本当のことを知ったら…。）

たまに、無垢な穂乃香を見ると、罪悪感にかられることがある。

高志と破局したあの時、思わず心の中で喜んだことを。

そして。

——自分がまだ穂乃香を本当の意味で抱いたことがないのに、彼女を騙していることを…。

「——香っ。穂乃香っ、いい加減起きろ。」

ぺちぺちと自分の頬を打つ感触が眠りにについている穂乃香の意識を呼び戻した。

（——もう、もう少し……。）

昨日の夜は、一度目覚めてからしばらく寝られなかったこともあり、再び眠りにつこうとする穂乃香だが、穂乃香の頬を打つ感触は一向にやめる気配がない。

両手で払いのけても払いのけても、しつこく穂乃香の頬を叩く。

「——んっ……。」

小さな声とともに瞳を開けた穂乃香の目の前に、暁の顔がある。しかも息がかかりそうなほど至近距離だ。

「わっ。課長?!」

ごちん。

驚きのあまり、飛び起きた穂乃香の頭が見事、暁の顎にクリンヒットを飛ばす。

「——ったっ。」

目から火花がでるとはまさにこのことだ。

そう思わず呟いた穂乃香だが、暁の方が衝撃がすごかったらしく、顎を押さえて下を向いたままだ。

「すっ。すみません、課長!!」

大丈夫ですか?とばかりに覗き込む穂乃香に、暁はうつすらと目を開けた。その暁の目に映ったのは、心配そうに覗き込む穂乃香の真剣な瞳と、誘うように少し開かれた赤い唇。

ちゅっ。

暁の唇が、心配げにやや開かれた穂乃香のそれに軽く音を立てて啄ばむ。

「なっ／＼／。」

「大丈夫だ。心配かけたな。」

そういつて嬉しそうに微笑む暁に対し、穂乃香の方は今の突然の行為に啞然とした様子だ。

「なっ、何するんですか?! いきなり!!」

それもそうだろう。心配で心配でそばによった自分に突然のキスがやってくるなど思いもしなかったのだ。

「え? 何って「接吻」だよ?」

しれつと応える暁に穂乃香は瞬く間に部屋の端へと逃げ込んだ。しかも「キス」ではなく、「接吻」というのが、妙に艶かしく穂乃香の耳に響いた。

「それは分かってます!! 私が聞きたいのは、その理由ですよ!!」

「可愛かったから。」

「はあ?」

「穂乃香があまりに可愛かったから、俺からの愛情表現だよ。」
恥ずかしいそぶりを見せずに応える暁に、思わず脱力する。

「——言ってて恥ずかしくないんですか?」

「全然。何度も言ってるけど、これが俺の本当の気持ちだしね。」

当然のように応える暁に、二の句も告げない。

だが、聞きたいことはそれだけではなかったことを穂乃香は不意に思い出した。

「そ、そうだ。課長。この部屋にどうやって入ってきたんですか?」

確か穂乃香のあまり覚えのよろしくない記憶では、この部屋は内側からしか鍵が開かないと言ってた筈だ。

「どうやって? そんなの決まってるじゃないか。部屋のドアから普通に入ってきたけど?」

他にどうやって入ってくるんだとばかりに応える。

「それは分かってますよ。でも、この部屋。鍵がかかった思
うんですが…」

「ああ。かかってたけど？」

「ですよ？で、この部屋のドアをどうやって開けたんです？」
そう尋ねる穂乃香に、暁は先ほど手に持っていたこの部屋の鍵
を嬉しそうに見せびらかした。

「そんなの、決まってるだろ？この鍵を使ってだよ。」

シルバーに光る鍵を得意そうに掲げて見せた。

「っな…。この部屋の鍵はないって前言ってませんでした！？」

「あ？そんなこと言ったか？」

「はい。言いました。『この部屋は外からは開けられないから、
ゆっくり時間を過ごせる』って。」

コレだけは間違いないと断言するように話す穂乃香にくすつと
笑う暁。

「ああ、それね。この部屋の鍵はちゃんと仕舞ってるから、外
からは開けられないっていう意味だったんだけど、ちょっと説明不
足だったのかもな。」

「……………」

（絶対、わざとだ！！）

今までの暁の所業を思い返しても、彼が言い忘れるだなんて事
はありえないだろう。

暁の応えに沈黙した穂乃香に、暁は畳み掛けるように口を開い
た。

「あ、因みに今日でペナルティが9個になったからな。」

「へ？」

「昨日までは6個だったし、しかもここ1週間は全く『課長』
って言うことがなかったから、ペナルティはもう発生しないかなっ
てちょっとがっかりしてたんだが、さつき3回も連呼してくれたん
でね。今日で9個目。早くもう一回『課長』って呼んでくれるのを

楽しみにしているから。」

そう嬉しそうに微笑んだ。

どんなに穂乃香がパニックになっ
ていても、冷静な目で物事を
見ている。

やっぱり暁は、どこまでいっ
ても越野暁だった。

「橘さん。先ほど提出してくれた書類だが…。」
金曜日。

いつものように仕事をこなしていると、課長席から暁が声をかけてくる。

暁と付き合うようになって3ヶ月。

付き合い始めた頃に使っていた凡ミスをする回数も以前より明らかに減ってきていた。

だから、最近ではこんな風に呼びつられることも稀になっているだけに、ちよつとびっくりしたように顔を上げた。

「あ、はい。」

穂乃香はいそいそと暁の方に急いだ。

「ほら、ここの…。」

そういいながら、書類を指すその視線の先。明らかに先ほど提出した書類よりも3回りも小さい紙を指差していた。

『今日は、先に家で待っていてくれ』

そう書かれた紙と暁のマンションのキー。

穂乃香は大きく息をついた。

もう何度目でしょう。と、口に出して言いたくもなる。

「あ、すみません。僕の見間違いでした。橘さん、もう席に戻ってくださいっていいですよ?」

そう言いながら、穂乃香の手のひらに分からないように先ほどの手に持っていたものを手渡した。

「はい、じゃあ失礼します。『課長』」

思わず嫌みつたらしく『課長』と言う言葉を付けて、穂乃香は席に戻る。真紀の方は意味ありげに穂乃香に向かってにっこり笑って見せた。

「で、何の用だったの？『越野課長』」

昼休み。

嬉しそうに問いかけてくる真紀に、穂乃香はちらつと視線を向ける。

「何？なんだか嬉しそうだけど？」

「だから、昼休みのちよつと前。『橘さん。先ほど提出してくれた書類だが……。』」

「あ、あれは……。」

嬉々として先ほどの暁の言葉を繰り返す真紀に、穂乃香は視線を外す。

暁が誰にも分からないように鍵を渡したのは穂乃香自身も分かってはいるのだが、後ろ暗いことがあるのでその言葉を聞くとどうしてもしどろもどろになってしまう。

「今日も渡されたんでしょ？鍵。」

「……。」

よもやここで「はい」とは言えない。

だが、返答しない＝肯定であることは、真紀には明白である。

「もう何週目だっけ？毎回毎回、ご苦勞様よね、課長も。」

真紀の目から見て、穂乃香と暁のやり取りはもう微笑ましいを通り越して呆れるばかりである。

（つていうより、むしろ。じれったいって感じ?!）

「——あの、さ。穂乃香ちゃん？ずっと思ってたんだけど、なんで毎回同じことをしてるのよ、あなた達。」

「同じこと？」

「そう。毎回穂乃香を呼んで、鍵を渡して先に部屋に行くように言うわけでしょ？だったら何で穂乃香に合鍵、渡さないのよ？」

「え？」

「だって毎回毎回。決まってでしょ？金曜日に当たり前のように穂乃香を呼びつけてるじゃない？そのうち怪しまれるよ。」

呆れ気味に呟く真紀の言葉に、穂乃香はその言葉に愕然とする。

『何で穂乃香に合鍵、渡さないのよ？』

その事実到现在初めて気がついた。

（——そ、そうだわ。なんで鍵を渡してくれないんだろう？）

今まで気がつかなかったのだが、確かに真紀の指摘どおりである。毎回毎回、見つからないようにと危ない橋を渡るくらいなら、合鍵を渡してくれている方がよっぽど良いだろう。

そうすれば、あんなふうに呼び出すこともなく、メール一本で事はすむはずだ。

（——もしかして、曉さんって…。）

「…何か変な趣味でもあるのかしら？」

「へ？」

「きつと、そうよ。だから木曜日の夜までにそれをどこかに隠してるんだわ！！」

「……………」

さすが穂乃香である。

普通はそこで、

「他に何か疚しい——例えば、女の人がいるのかな？とか思わないんだ？」

あまりにも天然ぶりに、真紀はそう呟いてしまふ。

「他の女の人？」

不思議そうに目をきょとんとさせる穂乃香に、真紀は「うっん、別に。」と返事をする。

（前向きと言うか、天然と言うか…。）

いずれにせよ、穂乃香が気にしていないのであれば、そんなこともないだろう。

しかも毎週、週末を二人きりで過ごしているようだし、曉に他の女の影は今のところ、見当たらない。ということは…。

（牽制つてところか…。）

事実。

密かに穂乃香を狙っていた男性社員から、「課長と橘さん、最近おかしくないか？」と何気に尋ねられたのも数回どころではない。穂乃香自身は気がついていないのだが、密かに穂乃香に気がある男性社員は存在するのだ。そして、それとなく穂乃香のことを聞き出そうと真紀に話しかけてくる人たちを、真紀は頑張って煙に巻いているのだ。

つまり、暁の小細工は功を奏している、ってわけだ。

「ね、それよりさ。穂乃香？」

「何？」

「課長のマンションってどんなの？」

「え？」

「実は前から気になってるのよね。やっぱり部屋の中は綺麗なの？」

穂乃香が呆れ気味に真紀を見るが、真紀の方はそんな視線、痛くも痒くもないようだ。

「うん。普通、かな。」

「普通？」

「うん。あ、でも。」

「でも？」

「清水君の部屋よりは綺麗だよ。」

「……………」

そう報告する穂乃香に、無言の鉄拳が下ったのは言うまでもない。

「ホントに気をつけなよ。っていうか、いつそのこと公表したらいいじゃない？『課長は私のものです』ってさ。」

昼食後。

今日は金曜日だから特別に、デザート付きのランチを頼んだので、それについているアイスを食べながら真紀が呟く。

「——やだ。」

「『やだ』じゃないわよ？大体、公表したがっていないのは穂乃香の方なんでしょ？課長はいいって言ってるんでしょ？」

「だって…。」

「まあ、確かにちよつと怖いことになりそうな気もするけどさ。」
何と言つても課長には『隠れ親衛隊』なるものが存在するんだもんねえ。と、ちよつと気の毒そうに言う。

「——うん。まあ、それだけじゃないんだけどね。」

大きなため息とともに、穂乃香はぼそつと応える。

そのやや不機嫌そうな穂乃香の様子に、真紀はピンときた。

「…なるほどね。公表しちゃうと穂乃香の大好きな越野課長の素敵な仕事をしている姿を直接見れなくなっちゃうもんね。」

につこり笑う真紀に、穂乃香はふいつと視線を反らせる。

図星、なだけに反論できない。

「大変よねえ、課長みたいにかっこいい彼氏だと、色々…。」

「な、何よ、色々…。」

「だって、心配事が多そうじゃない？『隠れ親衛隊』の存在もだけれどさ、何て…だって、『隠れて』どころか『堂々と』課長に告白している人もいるみたいだし、さ。」

「え、？告白？」

「あれ？知らなかったの？——結構露骨にアプローチしている人が多いわよ。」

「!!」

やっぱりね、と真紀は分からないようにため息をついた。

（さすが穂乃香、だわ。あれほど露骨にアプローチされているのに気付かないだなんて…。）

それに今のところ、暁の方も全く穂乃香以外視野に入っていないみたいだし、真紀としてはそれほど気にしていない。

（——っていうか、課長の方がゾッコンって感じたもんね。）

真紀は穂乃香をくどこうとしている輩を暁が密かに退けているのも気付いている。

（つたく、素直じゃないんだから…。）

真紀はもうひたすらため息をつくしかないと言うところだ。

多分、暁の方は天然の穂乃香にあわせてゆっくりと進めているのだろう…。それは分かるのだが…。

「分かるけど、課長つてば…。」

あまりにも不器用な二人だと思つと、呆れる以外どうしようもない。

「真紀。何か言つた？」

「え？あ、ううん。なんでもないわ。そ・れ・よ・り。一回言つてみたら？」

「へ？」

「『へ？』じゃないわよ。合鍵のこと。このままだとそんなに時間がたたないうちに、ばれちゃうわよ。きつと。」

「——。」

「今月に入つて、穂乃香と課長のことを確かめに、何人も来たんだからね、私のところに。」

「え？」

「最近、ちよつと噂になつてるのよ、あなた達。——だから、ばれたくないんなら、課長に言つて合鍵をもらつたらいいじゃない。もう付き合つて大分なるんでしょ？」

「——そんなことない、よ。」

「ま、どっちでもいいけどさ。とりあえず、今日の夜にでも課長に話してみなさい。分かったわね。」

真紀はそう言うと、食べ終わった食器を返却口へと持っていく。そろそろ、昼休みが終わる時間だった。

「なあ、橘。」

今日の就業時間を迎えた頃。

同期の中でも穂乃香と結構仲のいい藤原が声をかけてきた。

「あ、藤原君。なに？」

「——実は、さ。」

「うん？」

「あ、えつと……。あの、さ。今日この後、時間あるか？」

ちよつと言いくそうな藤原に、穂乃香は首をかしげる。

「あ、えつと。——ごめん。今日はちよつと無理かも……。」

「え？あ、ああ。いや、急ぎじゃないんだ。」

「何？珍しいね、藤原君がそんな言いくそうにしているのって

——何？相談事？」

「え？ま、まあな。——お前にしか言えない事なんだけどさ。」

「何よ？新しい彼女でも出来たの？」

「いや。そういうわけじゃないんだけど、さ……。」

「うそうそつ。絶対恋愛がらみでしょ？」

そういつてにつこり笑う穂乃香と、やや戸惑い気味の藤原。二人の様子は急いで帰宅しようとしていた人たちの中にあつて、一際目を引く。

もちろん。

この部署で一番大きな机で引き続き仕事をしている暁の目にも、だ。

「こら！そこ。橘と藤原！！仕事が終わったんならさっさと帰れ！残業しているヤツの邪魔だ。」

暁の不機嫌な声に逸早く反応したのは穂乃香だ。

「す、すみません。課長……。――週明けとかは無理かな？」
やや小さな声で問う穂乃香に、藤原が小さく頷いた。

「ああ。すまないな、突然呼び止めて。じゃあ、月曜日な。」

「うん。また月曜日ね。」

笑顔でそう微笑むと、穂乃香を待っている真紀の方に走っていった。

それを暁が冷ややかに見ていたのだった。

「うん。こんなもんか……。」

穂乃香は今ではもう自分の勝手のいいように置き換えている暁のキッチンからダイニングテーブルを見渡した。今日はカレイの煮つけと、お味噌汁。菊菜の煮びたしとサーモンのサラダ。そんなに大変ではないが、品数的には自分の満足のいくものだった。

先ほど暁に叱責されたからというわけではないが、いつも以上に丁寧に料理を作ってみたのだ。

（だってあれは仕方ないもんね。）

自分たちはすぐ帰れるのだが、あの場に数名、まだ残業しなければならぬ人たちがいたのだ。それを考えるとどう見ても自分たちが悪い。

「あとは、暁さんが帰ってくるの待ち、だよな。」

食事にはちよつと合わないのだが、野菜ジュースも作っている。普段、外食の多い暁はどうしても野菜が不足しがちなのだ。週に3回の食事で十分に野菜を取ってほしい穂乃香だった。

（でもでも、なんだか新婚さんみたいだよな？こんな風に暁さんの体を心配しているだなんて。）

暁が帰ってくるのをご飯を作って、お風呂とパジャマの用意をし

て待つ自分に思わず酔いしれてしまう。

「お帰りなさい。ご飯を先にする？それとお風呂ですか？」

「それはやっぱりご飯かな？穂乃香の作ってくれたご飯は美味しいからね。暖かいうちに食べようか。」

「そ、そんな。美味しいだなんて／＼」

「いや、本当だよ。穂乃香の手料理をこんなに食べられて、俺は幸せだよ。」

「ま／＼、暁さんたらっ。」

そんな一人芝居をキッチンでしてしまうのも仕方がない。

——の、だろうか？

「ひゃっ。恥ずかしいわ。」

このまま放っておけばどんどん自分の世界に入っていきそうな穂乃香であった。

ピンポーン。

暁は毎週、自分の鍵を穂乃香に預けているので、このマンションの1階で一度、インターフォンを鳴らす。もうそれが当たり前のようになっていた。

「はい。」

インターフォンに出てみると、画面の向こうで嬉しそうに微笑んでいる暁の姿があった。

「あ、すぐあけますね。」

言葉の後ろにハートマークが飛びそうなほど嬉しそうに笑って穂乃香は施錠を解除する。

その2分後。戸をあけた向こうに暁本人が満面の笑顔があった。

「ただ今。穂乃香。」

そう言って暁のその腕に穂乃香は本当に安心したように飛び込ん

だ。

「お帰りなさい。」

穂乃香の体を優しく抱きしめたまま、暁は後ろ手に玄関の扉をゆっくり閉める。

二人きりの週末がまた始まるうとしている。

「美味しいよ、穂乃香。」

帰宅直後に穂乃香からの『お帰りなさい。ただ今帰ったよ』儀式が一段落した後の事だった。

「本当？」

「ああ。穂乃香の料理は本当に美味しいな。」

ただそれだけの会話。

だけど、それは穂乃香にとってこれ以上ないくらい嬉しいのだった。

こんなふとした瞬間にも暁に愛されているって思えるから…。

（毎回穂乃香を呼んで、鍵を渡して先に部屋に行くように言うわけでしょ？ だったら何で穂乃香に合鍵、渡さないのよ？）

昼間。

真紀と交わした会話が頭の中をよぎる。

真紀に指摘される前までは全然気がつかなかったのだが、一度その指摘を受けると、穂乃香の方も気になってしまう。

（——ちようदैいって言ったらくれるのかな…。）

穂乃香はそう自分に問いかけた。

（やっぱりくれないかも…。）

上目遣いに暁の方を見上げた。

静かな飄々とした表情で自分の手料理を平らげてくれる暁。だが、記憶がある限りでは一度も抱いてくれたこともない。

（くれない、よね？）

確信があるわけではない。

ただ、なんとなくそう思うのだ。

——だって、もしかえる気ならもつと早めに渡してくれていると思うもん。

そう思うと、なんだかさびしくなってくる。

「——穂乃香？」

「え？」

「『え？』じゃない。何かいいたいことでもあるのか？」

その暁の言葉に。穂乃香は大きく首を振る。

（やつぱり、こんなこと言えないもん。私からこんな事、やつぱり言えないよ）つ。いくらなんでも図々しいもんつ。）

ちよつと意気消沈する。

自分からこのマンションの鍵がほしいとは言えない穂乃香だった。

「別に……」

「『別に』って顔じゃないようだけど？——何かあったのか？」

怪訝そうな暁の声に、穂乃香はちよつと間をおいてから返事をする。

「ううん。」

少し後ろめたそうな顔。

それが、暁の心に小さな疑いを作る。

「へえ？何も無いのにそんな顔をするのか？穂乃香は。」

口元には不気味なほど落ち着いた笑みが浮かんでいた。だが、笑っているのに瞳にその笑みはなかった。

「穂乃香？俺に隠し事をしているという事は、俺に言えないような事があったんだよね？」

「え？」

「今日、誰か男性社員から何か言われたりしたのか？」

「な、何を？」

「へえ、とぼけるのか？——今日、藤原と楽しそうにしゃべっていたじゃないか？」

今日の就業後のことを言っているのだろう。

それだけは理解できる。

——何と言っても当の暁に怒られたのだから…。
だが。

こんな時に藤原の名前が出てくるとは思っていなかった穂乃香は驚いたように視線を上げた。

「藤原君？」

「何を吃驚しているんだ？ 藤原に何か言われたんだろ？」

「別に何も言われてないもん！！」

「じゃあ、何であんなふうに楽しそうにしゃべっていたんだ？」

暁の声がいつもよりずっと冷ややかに響く。

「知らないわ。何か話したいことがあるって言われたけど…。」

「話したいこと？」

「う、うん…。でも、あの時はちゃんと断ったもん！！」

「ホントに？」

「何もなかったわ。だって今日はここに来る約束をしてたんだもん。話はまた今度って事になったわ。」

「へえ？ここに来る約束をしてなかったらこのこと藤原の後についていつていたって訳だ？」

微笑を浮かべ、暁はテーブルを回り込んで穂乃香の顎をそつと持ち上げる。

「な、何を…。」

「決まってるじゃないか？俺に隠し事をするその悪い唇をふさいでしまうんだよ？」

「隠し事、な——っ。」

暁は穂乃香の唇に自分のそれを重ねた。

「——んっ？！」

いつもは啄ばむような優しいキスや、少々強引だがそれでも、愛情を感じられるような甘い口付けだった。

だが、今回は違う。

今までのようなのではなく、男が女を屈服させようと言う征服欲

だけのものだった。

愛情なんて欠片もない。

それが穂乃香にもありありと分かってしまった。

「やつ。——らさっ……。」

暁のキスから逃れようと目がく穂乃香に、暁は顎を持ち上げていた手をそのまま穂乃香の体に回した。

「！！」

左手は穂乃香の体を自分に押し付けたまま、暁の利き腕が強引に穂乃香の胸元をまさぐる。

それは征服欲とエゴに満ち溢れた行為で、今までの意地悪だがそれが穂乃香への愛情の裏返しなのだと、いつもどこかで感じていた暁の愛撫とは天と地ほどの差があった。

「やつ。やだっ。暁さん！！」

唇が穂乃香の口に含みきれなかった唾液を追うようにやや下へと降りていく。そしてその首筋にきつく。自分の所有であると言う証を散らせた。

「やつ。やめて！！」

抗っても抗っても一向に止めるどころかますます激しくなる暁の行動に、穂乃香はどうしたらいいのかも良く分からなかった。

ただ分かっているのはいつもの暁とはかなり様子が違うことと、これが穂乃香にとって受け入れがたい事実だと言うこと。ただ、それだけだった。

「やだっ。やだっ！！止めてっ！！」

穂乃香は暁の手から少しでも遠ざかろうとどんどん後退していく……。

「きゃっ。」

ボタン。

穂乃香の足がリビングのソファに躓いた。そのままソファに倒れこむ穂乃香の様子に躊躇することなく暁の手は先を急ぐ。暁の手が穂乃香の背中に回ってブラのホックを外す。

「嫌だつてばっ。」

もかく穂乃香に、暁はさらに押さえつけるように体を穂乃香の細い体軀の上にのしかかる。

ぱしん。

暁の頬を打つ大きな音が、静寂した空間に響いた。

乾いたその音は一人暴走をしようとした暁に一瞬の隙を作る。

「——のか……。」

ハッとしたように、穂乃香の体をまさぐっていた暁の手が瞬時に動きを止めた。

穂乃香の目に、呆然としている暁の表情が焼きつく。さっきまでの鬼気迫ったような暁の表情ではなかった。

（——でも、怖いっ。）

いままで見ていた暁とは全く違った先ほどの暁の様子に、穂乃香は恐怖を感じてしまう。

これまでずっと穂乃香の歩調に合わせるようにゆっくりと歩んできただけに、突然の暁の変貌に穂乃香はショックだった。

——分からない……。っ。

その言葉しか思いつかない。

今まで大切にしてきてくれた暁とはまるっきり違う様子。

（こんなの、暁さんじゃない！！）

確かに少々強引に穂乃香に迫る事はあったが、どんな時でもその瞳には優しく、穂乃香への愛情が映っていた。こんな蹂躪するような、穂乃香を欲望の対象とのみみなした瞳で見つめることなどかつてなかった。

——そう。まるで、一夜限りの行きずりの相手のように……。

「——るっ。」

穂乃香はそう呟くと、コートとバッグを引つつかんで暁のマンションから飛び出した。

暁がどう思っているのかは分からないが、とりあえずこの場から

逃げ出したかった。こんな風に普通じゃない暁と二人きりでいられるほどの強さは穂乃香にはない。

「穂乃香?!」

我に返った暁は一瞬、穂乃香の後を追おうと声をかける。

だがその言葉に振り向くことなく、一目散に逃げていく穂乃香。

そのまるで怯えるように逃げていく穂乃香を暁は追いかけることが出来なかった。

——穂乃香の心を映すように、外は真っ白な雪が降っていた。
素敵なホワイトクリスマスを過ごすはずの週末は、暁と穂乃香の間にとこまでも白い道を作るだけだった…。

「——なんて事をしてしまったんだ…。」

暁は自分を突き飛ばし、マンションを出て行った穂乃香の後を追うことが出来ずに、半ば呆然とリビングに立ちすくんでいた。

穂乃香が帰宅する直前。何気なく穂乃香を見つめていた暁の瞳に映った出来事が、穂乃香の手料理を食べていてもどうしてもちらついていたのだ。

穂乃香の同期の藤原忍。

暁が穂乃香と恋人関係になるずっと前から、それこそ穂乃香が暁を「胡散臭い」と思っていた時からずっと穂乃香のすぐそばにいた男性だ。

藤原が穂乃香のことをどう思っているかというのは周知の事実で、気がついていないのははっきり言って穂乃香ぐらいだろう。

その男が、自分の前で穂乃香に声をかけ、それに嬉しそうに笑っている穂乃香の姿にどうしても嫉妬を覚えずにはいられない。

——懐の小さい男だ。

そう自分でも思う。

本当の恋人同士だったら、そんな事「なんでもない」と笑い飛ばすことが出来るだろう。

決して穂乃香を信じていないわけではない。
だが…。

（どうして藤原、なんだ…。）

そう思わずにはいられない。

あれが多分藤原ではなく他の男性社員だったらまだ暁の中に余裕があっただろう。

暁にとっては誰よりも要注意人物と見ないしている藤原だからこそ、夕方に穂乃香にやや厳しい声で注意をし、自宅に帰って穂乃香の手料理を食べると言う幸せな時でさえ、ちらついてしまうのだ。

穂乃香が入社して2年。

この2年間、ひたすら見守るしかなかった暁よりもずっと近くにいたのが藤原だった。

何かの飲み会の時。

それこそ男性社員だけで集まった時だ。

『俺、橘に告白します!!』

酒に酔って、だがどうどうと宣言した藤原の言葉が忘れられない。その当時。

穂乃香には前の彼氏がいて、それでも想いを伝えたいという藤原になんとなく羨望に似た思いを持ったのだ。

（——俺には出来ない。）

そう思った。

いくら好きでも、彼氏のいる女性に告白出来るほど図々しくはない。——そう思ったのだ。

その藤原が、今穂乃香に近づいている。

十中八九。

告白するつもりだろう…。

渡すつもりはさらさらない。

でなければ、あの日。

穂乃香が前の彼氏に振られたあの日に、酔っ払ったままの穂乃香を連れて帰り、『穂乃香と寝た』などという嘘などつきはしなかった。——あんな風に穂乃香が弱っていることをいい事に付けこむようなまねは…。

（だが…。）

ずっと後ろめたかったのだ。

こんな風に穂乃香を騙して半ば強引に付き合うようになった事に。
（どうすれば、いい？）
そう自答自問する暁だが、答えなど出ようはずがない。ただ分かることは、一刻も早く穂乃香に謝ること。ただそれだけだった。
（あと、どれくらい待てば穂乃香は自宅に着くのだろう・・・。）
携帯電話では、サブディスプレイを見て暁だと分かると、穂乃香が出ない可能性もある。それを考えると穂乃香の自宅の電話に直接かけたほうがいいような気がし、暁はリビングにある時計を見て、ひたすら時間が過ぎていくのを、待っていた。

『ピンポン、ピンポン、ピンポン——っ。』
暁のマンションからタクシーで20分にある真紀の自宅のインターフォンが激しく鳴る。

もう夜の10時だ。

約束もないのにこんな時間に尋ねてくる友人に心当たりはない真紀は、やや不思議に誰何する。

「誰？」

「——あ、私。。。」

「穂乃香?!」

その声が届いて待つこと数秒。玄関のドアが荒々しく開けられた。門の外には雪に濡れたままの穂乃香が立っていた。

「——真紀。。。」

「と、とりあえず上がりなよ。——私の部屋で待ってて!!」
そのまま言葉を紡ぐとする穂乃香を真紀は慌てて自宅に招き入

れた。濡れているから、と遠慮をする穂乃香に対し真紀のほうはや強引に穂乃香を二階に通じる階段へと導く。

「何を言ってるの。すごく冷たい体をしているじゃない。私の部屋は暖房が入ってるからとりあえず中で待っておくのよ?!」

そういい捨てて自分は台所へと走っていた。

「お母さん、暖かいお茶を入れて!」

そんな声がリビングの方から聞こえてくる。

(なんか、いいよね。)

社会人になってから一人暮らしをしている穂乃香にとってはなんだか懐かしい風景だった。さっきまでの悲壮な思いは少し和らぎ、心が少しだけ温かくなる。

そんなことを思いながら穂乃香は二階の突き当たりの真紀の部屋にそつと入った。

そこは高校生時代と少しも変わらない安らぎに満ちた部屋だったそれはもう当たり前すぎるくらいに通いなれた部屋。

いつもと変わらないそのぬくもりに、穂乃香は一筋の涙をこぼした。

「穂乃香、開けるわよ?」

その声と共に入ってきた真紀の手には、温かいお茶と、大きなバスタオルが握られていた。

「ま・・・き——。」

「ほら。とりあえずお茶を飲んで? 温まるわよ?」

理由もなにも聞かず。

真紀はそういつて促す。

穂乃香の方も言われるがまま、お茶を飲み、服の上から水滴を吸い取った。

何もせず、真紀も穂乃香の横にそつと座る。

高校時代から何度もあつた事だ。

本当に悲しい時、しんどい時は、真紀はこんな風に何も聞かずに、穂乃香にそつと寄り添うだけだ。

それだけで、穂乃香は癒されてきた。そして多分、これからも。

「——穂乃香ちゃん、お風呂が沸いたわよ?」

穂乃香の体が少しずつ温まってきた時。

真紀の母親の声が、階下から聞こえる。

「ほら、行って来なよ。とりあえずパジャマはこれね?」

いつしか穂乃香専用を用意されたパジャマ。

ここには、穂乃香が求める全てのものが揃っている。

——これで、来週からは頑張れる。

そんな思いが穂乃香を大きく勇気付けるのだった。

「ねえ、穂乃香？」

真紀の家のお風呂でゆつくりして部屋に戻ってきた穂乃香に真紀はちよつと躊躇い気味に問いかける。

「何？」

今は気持ちが大分落ち着いたのか、先ほども幾分顔色がいい穂乃香がいる。

「あの、ね。詳しくは聞かないけど…。今日穂乃香があんな時間にならず濡れのまま家の前にいたのは、越野課長のせい？」

少しためらいを見せたものの、穂乃香はかすかに頷いた。

「——そう。」

穂乃香が三角座りをしたその背中に合わせるように真紀も三角座りをする。

何かあるたびに、二人はこんな風に背中合わせで会話をしてきた。

「…今日、明日って家にこのまま泊まっていきなよ？」

「でも…。」

「何があつたか詳しくは聞かないよ。けどね、こんな風に泣きそうになつていいる穂乃香を私が放っておける分けないでしょ？それにもうお母さんには言っちゃったしね。明日の朝、張り切つてご飯を作らなきゃって嬉しそうに言つてたわよ？」

「——でも悪いわ…。」

「あのね、穂乃香。家はむしろ大歓迎なのよ。私は一人っ子だし、まるで妹が帰ってきたみたいで。」

「妹って…。」

「あら？だつて誕生日から言つても性格から言つても私のほうがお姉さんでしょ？」

「そんな事ないわよ。」

「ううん。これだけは絶対自信あるわ。高校時代の友達に聞いて

くれてもいいくらいよ。お母さんなんて、『アンタじゃなくて穂乃香ちゃんが私の娘だったらよかったのに』って何度も言ってるくらいよ。だから気にしないで泊まっていきなさいよ。月曜日は我が家から一緒に出勤するんだからね。因みに服は私のを着ていけばいいのよ。」

有無を言わせない真紀の言葉に、穂乃香は微笑する。

「ありがとう。」

「そう。それでいいのよ。明日は寝不足でも大丈夫でしょ？今からDVDでも見る？」

「うん。——あ、でも土曜日って清水君とデートじゃないの？」
ふと思いついた。

いつも土曜日から日曜にかけてデートするのが真紀の週間予定だったはずだ。

「ああ。なんかね、男友達と雪山でスキーですって。」

「スキー？」

「そ。しかも野郎ばかり5人でね。何が楽しいんだか。」

「そうなの？」

「そ。毎年1回の行事だから、文句は言わないことにしているの。だから、穂乃香がこの週末と一緒に過ごしてくれるとすごく嬉しいんだ。」

そう言って笑う真紀の目には嘘偽りなどない。気遣いではない。

そこに真紀の本心があふれているからこそ、穂乃香は安心して微笑んだ。

「うん。」

いつもと同じように接してくれる。

穂乃香にはそんな真紀の存在が、本当にありがたかった…。

3泊4日。

穂乃香は、真紀の自宅でこの休みを過ごした。
久しぶりの真紀との休日。

真紀のほうも、あえて何も聞かず、ただ穂乃香とすごすこの休日を楽しんでいるようだ。

そしてただ、時折、ちょっと心配そうに穂乃香の表情を覗き込むことはある。だが、それだけだ。

真紀と過ごすこの週末が、穂乃香にとって本当にかげえのないものになっていく。

カタカタカタカタ……。――

月曜日。

いつものように時間は過ぎていった。――まるで、何事もなかったかのように。

ただ違うのは、暁の視線が穂乃香の頭上に止まることがなかった、ただそれだけだ。

勿論。

気づいているのは、暁と穂乃香、それに真紀くらいだろうか。だが、誰にもわからないくらい些細なこととはいえ、穂乃香にとってはとても大きなことだった。

（――暁さん……）

気づかれないように、何度も何度も暁のほうを伺う。だが、その日。暁と視線が合うことはついになかった。

長い。長い一日だった……。

（もう、ダメなのかな。）

そんな言葉が頭の中に浮かぶ。

金曜日。何があんなふうに暁を怒らせたのかは、わからない。ただ、いつもの彼じゃなかった暁が怖かったのだ。

――やっぱり、逃げちゃいけなかったのかな？

いつも大切にしてくれているのは分かっていた。だからあの態度

の急変には驚いたけど…。

（逃げちゃ、いけなかったんだよね。きつと…。）

逃げずにちゃんと話を聞いていれば、こんな気まずいこともなかっただろう。

そして何より。

——抱いてもらえたかも、しれない…。

そんな言葉が頭をよぎる。

暁とは、それこそ付き合うきっかけとなった時以来、抱かれていないのだ。

（私の身体に興味がないのかな？）

そんな風に思うときもあるが、暁の視線や態度からは決してそうではない事が分かる。——だからこそ。不安だった。

金曜日の夜。

あんな強引で乱暴とはいえ、もしかしたら、あのまま暁のマンションにいれば、彼に抱かれていただろう。そうすれば、『愛されていないのかな』

』と思うこともなかったのかもしれない。

（逃げなきゃ、よかった…。）

だが、今更。

暁のマンションに行く勇氣などない。しかも、今日のように暁に無視をされている今の状態では…。

——もう、ダメ、かな…。

穂乃香のため息とともに、時間はゆっくりと進んでいき、やがて定時を迎えることになる。

「留守、か？」

金曜日の晩から何度も何度も穂乃香の自宅に電話をしてみたが一向に出る様子がない。だから、穂乃香のマンションに来てみたのだが…。

もうとつくに日が暮れているというのに、部屋の電気ひとつ点いていないようだ。

（——どこへ行ったんだ？）

金曜日からずっと、暁は罪悪感に駆られていた。穂乃香は全く藤原の気持ちに気づいてなどいないのだ。とどのつまり、藤原はただの同僚でしかない。それなのに、暁は穂乃香の気持ちも考えずに嫉妬して、無理やり穂乃香を蹂躪しようとしてしまったのだ。

（…最低、だな。）

今まで穂乃香を抱かずに大切にしてきたのに、それが逆に自分の気持ちを押し付ける形になってしまったのだ。

もし、これがもっと早くに穂乃香を抱いていれば違ったのかもしれない。

（少なくとも、あんなときで藤原に嫉妬することなどなかっただろう…。）

いや、嫉妬していたかもしれない。

だが、嫉妬していたとしても、今回ほど動揺はしなかっただろう。なぜなら、穂乃香が自分のものだという思いがあっただろうから…。

——もう、遅いのだろうか…。

そんな言葉が暁の脳裏に浮かんでは消えていく。そうは思いたくはない。

だが、いつものような余裕は今の暁にはなかった。自信などなかった。ただあるのは、不安だけだ。

（穂乃香を失うかもしれない…。）

その不安が一層、暁を駆り立てていく。そしてその不安な思いのまま、このマンションの前までやってきたのだが…。

暁を迎えたのは、真っ暗な穂乃香の部屋。

（どこに行った？）

今朝から何度も何度も穂乃香の携帯に電話をかけているのだが、留守番電話になっていてまったくかからないのだ。

（——どこだ？小山さんのところか？）

いつも本当に仲よさそうに過ごしている穂乃香と真紀の姿が暁の脳裏に浮かぶ。

（もしかしたら、いや、おそらくそうだろう。）

以前、穂乃香がどれだけ真紀のことを頼りにしているのか聞いたことがある。だが、暁は真紀の連絡先も住所も何も知らないのだ。

——ただ、待つてるだけしか出来ないのだろうか…。

日曜日の今日。この時間になっても穂乃香が自宅にいないということは、おそらく穂乃香は真紀のところにいるのだろっし、こちらから連絡が取れない以上、どうしようもない。

どちらにしても明日には穂乃香と会社で顔を合わせることが出来るはずだ。

もし、万が一。穂乃香が出勤してこなくても真紀は必ず出勤してきているはずだ。となれば、明日になれば穂乃香の居場所が少なくとも分かるはずだ。

（ここにいてもしようがない…。）

それは分かっている。

どうしようもない。

自分が悪かったのだ。激情のまま、穂乃香にあんなことをしなければ今頃穂乃香はこの腕の中で、二人でゆったりと過ごしていただ

ろう。

自分でも分かっている。

ここにいるよりも、明日の仕事のために自宅マンションでゆっくりしたほうがいいだろう。穂乃香が今日は多分帰宅しては来ないだろうから、明日にでも穂乃香を捕まえて、ちゃんと謝ったほうが懸命だ。

それは分かっている。分かっているのだが…。

——もう少し。

もしかしたら穂乃香が帰ってくるかもしれない。ほんの少しの希望であるが、それでもこの場所を離れることは出来ない。

暁は穂乃香の部屋の窓が見える、その場所から。車を動かすことの出来ない暁だった。

月曜日。

結局、穂乃香を捕まえることの出来ないまま、時間が過ぎてきてしまった。

（——どんな顔をして会えばいいのだろう…。）

そんなことばかり思ってしまう。何度か穂乃香の視線を感じてはいるのだが、暁自身が穂乃香のほうへ視線を向けることはなかった。

——いや、向けることが出来なかった。

視線が合つてどんな顔をすればいいのだろう。

なんて言葉をかけたらいいのだろう。

そんな思いがぐるぐると暁の頭の中に駆け巡る。後悔なんてそんな簡単な思いではない。

自分の思いをぶつけてしまった、穂乃香の気持ちを無視して自分の我を通そうとしてしまった。その事実がどうしても暁を苛むのだ。何度か穂乃香の視線を感じた。おそろおそろこちらの様子を伺うような彼女の態度が余計に金曜日のことを思い出させるようで、どうしても彼女の視線を真っ向から受け取る事が出来なかった。

——どうすればいい？

二人の関係を知っている小山真紀に間を取り持つてもらうことも考えないではなかった。だが、真紀のほうは穂乃香以上に鋭い視線を常に暁に発しており、はっきり言って真紀と視線を合わせるのも気まずいのだった。

(…多分、聞いているのだろう…。)

おそらくだが、きっと間違いない。

そう思うと、先日の自分の行動がますます身勝手に思え、結局は堂々巡りになってしまったのだ。

そうしている間にも、時間は刻一刻と過ぎていく。

暁がどれだけ穂乃香と話せるように時間を作ろうとしても、時間のほうは待つてはくれなかった。

やがて、

就業時間の終わりを迎える。

そして、

金曜日の約束どおり、穂乃香は藤原と定時に帰っていった。暁にはそれを止めるすべもなく、ただ見守るしかなかったのだ。

定時。

藤原は、仕事を早めに切り上げて穂乃香の様子を伺う。

（もう、終わりそうだな…。）

今日は一世一代の決心の日。

ずっと、それこそ入社当時からずっと想っていた穂乃香へ思いを告げる。そう決心してもう何ヶ月経っただろう。

何度となくあった同期会。

藤原は何度となく思いを告げようとしたのだ。というより、実際さりげなく何度も告げたのだ。だが、本人は気づいていないようで、軽く流され続けたのだ。しかもその当時は、穂乃香には彼氏がおり、それも大きなネックになっていた。

だが。

最近、穂乃香が彼氏と別れたとの情報が、社内に密かに流れた。

訝しく思った藤原が真紀に確認したところ、それを認めたのだ。

（——しばらくは…。）

そう思っ、て、ここ数ヶ月見守ってきた。

だが、もう傷も癒えたころだろう。そう思っ、て今日、呼び出すことにした。

ただ、少し気になっていることがある。

（——金曜日…。）

穂乃香が予定があつたということだ。

今から考えても、金曜日に毎週のように定時に帰っているような気がする。しかも、藤原がみていると何やら課長と話していることが多いような気がするのだ。

特に特別な空気が流れているようには見えなのだが、ここ数ヶ月、課長が穂乃香に声をかける回数が異常に多い。それがすごく気にな

ってしまっ。

何か理由があるのか？

そんな勘ぐりさえしてしまっ。

勘ぐりしてしまうほど、気になって仕方がない。

（こんな事ならいっそ、俺の気持ちを思い切って！！）

そう決意して二週間。

ようやくこの日が来た。——何度言おうとしたことか…。

（言おうと思うと、何故か…。）

邪魔が入るのだ。

それが仕事だったり、仕事だったり、仕事だったり…。

わざとか？！と思うほど、課長から仕事が回ってきて、辟易させられるのも度々だった。だが、今回に限っては特に課長からの仕事は回ってこず、定時に終わることが出来た。

（良かった…。今日は何とか大丈夫そうだ。）

本当にホッとする。最近特にここ二ヶ月は穂乃香とゆっくり喋れなかっただけ、その思いは強く残る。

「橘、そろそろ行けるか？」

こそこそと穂乃香に話しかけると、穂乃香のうなづく様子がある。大っぴらに二人きりで出るのは少し憚られるので、藤原は玄関で待っていることを告げ、先に行く。しばらくして席を立つ穂乃香に鋭い視線が投げかけられた。

当然、暁のものだ。

だが、穂乃香のほうはそんなことに気づくことなく、部屋を出て行く。

「で、何？話って？？」

穂乃香が居酒屋に入ってメニューを頼むなり、ストレートに問いかける。

（さすが、天然……。）

そんな事を思ってしまう藤原だった。真剣に今回こそと、思っていたはずなのに、なかなか言える様な雰囲気にはならない。

「あ、いや……。」

「何？相談か何か？——も、もしかして、恋愛相談、だったりする？」

——ドキッ。

（な、何で知ってるんだ？）

気づかれていないと思ったのに、実は天然っていうのは見かけだけなのか？

思わず、そんな事を考えてしまう藤原に、穂乃香は驚いた表情を返す。

「——え？！もしかして、そうなの。……で、誰なの？会社の人？？」

「……。」

「ね、誰？私の知ってる人？！——あ、もしかして、真紀ちゃん、とか？」

「……。」

「うん……。真紀ちゃんは、難しいかなあ。彼氏がいるから……。」

「——っと、待て、橘！——」

藤原の話も聞かず、どんどん勝手に進めていく穂乃香に、藤原は慌てて待ったをかける。

「え？違うの？？そうなんだと思ったんだけどなあ…。」

「いや、恋愛相談っていうか、さ…。」

（本人に、相談するわけにもいかないんだが…。）

そう心の中で答える藤原。穂乃香のほうは「？？」って感じた。

「た、例えばさ、」

「うん？」

——警戒心ゼロ。全く分かっていないようだ。

「例えば、橘って彼氏は？」

「——え、い、居るといえば（居るんだけど…。多分）」
（やっぱりか。）

穂乃香の答えを聞いて藤原は内心がつくりする。

（そうだよな…。橘のやつ、最近一段ときれいだもんな…。）
自問自答する藤原。

だが、ここまで来たら、彼としても引いては居られないのだ。

「た、例えば、仮に俺が橘のこと…。」

「——う、うん？」

「橘のこと、好きだったとするだろ？」

「え…。」

「だから、例えばの話だ。そうだったとして、俺みたいなただの同僚ってやつに告白されたら、どうする？」

藤原は、やや声を震わせながらも、穂乃香の反応を伺うように瞳を、覗き込んだ。

夜9時。

暁は再び、穂乃香のマンションの前に来ていた。

穂乃香が藤原と二人で定時退社して以来、仕事が全く手につかないのだ。

（遅い。遅すぎる…。）

まさか穂乃香があっさり藤原とどうこうなるとは思わない。だが、金曜日の晩の自分の態度…。

（あれは、そんな簡単に許されるようなことではない、な。）
そう思うとますます落ち込んでくる。

今日だって仕事中に一度も、穂乃香と視線が合わなかった。

（というより、視線を合わせてくれなかったもんな。）

いつもなら、時たま自分に視線を合わせては嬉しそうに微笑んでくれるのだ。

勿論、そう頻繁ではない。——だが…。

（それでも、時折でも視線は…。合っていたのだ。）

今日視線が合うというのは、穂乃香に告白しようとしている（であろう）藤原ばかり。

時折、穂乃香の様子をそれとなく見てみると、何回かに一回は藤原のほうも穂乃香を見ている。

——金曜日の出来事を、まるっと消してしまうことが出来たなら…。

そうこの4日間、毎日思っている。

もし、金曜日にあんなことがなければ、面と向かって

『藤原と二人きりで会わないように』

そう告げることが出来ていたのに…。

それを言えなくさせたのは、他でもない、自分の行動のせいなのだ。気持ちがいやるあまり、穂乃香の気持ちなど考えずに事に及ぼうとした。

あのまま、自分の欲望のまま穂乃香を抱いていれば——穂乃香はそのときつと、恐怖しか感じないことになっていたはずだ。あれは、恋人たちの営みなんかじゃない。ただの…暴力でしかなかったろう…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558r/>

君を想う夜

2011年12月3日09時50分発行